資料紹介

「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義

水野博太

はじめに

本資料は「高嶺三吉遺稿」（金沢大学附属図書館蔵）中、井上哲次郎が明治一七（一八八四）年二月以前に東京大学で行った「東洋哲学史」講義の記録である。「高嶺三吉遺稿」は、高嶺三吉（一八六一～八七年）が東京大学（帝国大学）選科在学中に残した聴講ノート集である。

本資料の意義

井上による「東洋哲学史」講義の存在及びその経緯は、井上自身が自伝で言及している[1]。そのため従来の井上研究でもその存在は広く認知され、後の井上の「三部作」に繋がるものとして位置づけられてきた[2]。しかし「東洋哲学史」講義の内容は長らく不明なままであった[3]。

近年、佐藤将之は井上円了が記録した同講義の聴講ノート（以下「円了本」）が東洋大学井上円了研究センターに保存されていることを[4]、また町泉寿郎は「高嶺三吉遺稿」の中に同講義を記録したと思われる部分が存在することを指摘した[5]。しかし、依然としてその講義の全体は示されていない。それゆえ、本資料を翻刻することは、特に初期の井上哲次郎に関する研究にとって有益と思われる。また、東京大学史という点から言えば、本資料は草創期の東京大学における授業内容の具体的な姿の一斑を示している。同時期の東京大学における講義の実態は、東京大学史史料研究会編『東京大学年報』（東京大学出版会）全五巻中に示された各教授・講師陣による授業報告（「申報」）により、ある程度は窺い知ることができるものの、なおも不明な点が多い。その意味で本資料は、東京大学史研究においても資料的価値を持つものと考えられる。なお、円了本については現在翻刻が計画されており[6]、また後述するように、本資料は円了本と内容的に重なる所も多いが、一部円了本には含まれない記述も存在する。それゆえ、本資料は独自の価値を持つものと言える。

井上哲次郎「東洋哲学史」講義

まず、井上の同講義について確認する。井上は明治一三（一八八〇）年に東京大学文学部を卒業後、当時の東京大学綜理・加藤弘之の勧めを受け、はじめ文部省編輯局で、次いで東京大学編輯所で『東洋

哲学史』の執筆に従事した。そして、井上自身が編纂した「巽軒年譜」によれば、明治一六（一八八三）年九月から『東洋哲学史』の原稿に基づいた講義を始め、聴講者は井上円了、三宅雄二郎、日高真実、棚橋一郎、松本源太郎等十数名がいたという。[7]

ところで、円了本を根拠として、実際の開講時期は明治一五年末からであるとする佐藤将之の議論がある。[8] 円了本には、講義の日付として「明治十六年一月ヨリ　第五講　一月十一日」という表記があり、[9] 以後ほぼ一週間ごとに講数と日付が進み、「第十七講　六月一日」で終わっている。[10] 一方で、明治一五（一八八二）年一二月当時の在籍学生を確認すると、井上円了（二年）、三宅雄二郎（四年）、日高真実（一年）、棚橋一郎（三年）らについては確認できるものの、[11] 井上哲次郎が聴講者の一人として記憶する松本源太郎については在籍を確認できず、その翌年度の明治一七（一八八四）年二月時点で初めて在籍を確認できる。[12] この問題については後述する。

高嶺三吉および「高嶺三吉遺稿」について

次に「高嶺三吉遺稿」について紹介する。高嶺は文久二（一八六一）年に金沢に生まれ、明治一六（一八八三）年九月に東京大学文学部に選科生として入学したが、卒業直前の明治二〇（一八八七）年七月に病没した。高嶺の死後、彼のノートを中心とする遺稿が友人らの手によって『高嶺君遺稿』（早川千吉郎編、一八八八年）として編纂・出版されたが、これとは別に大量の聴講ノートが第四高等中学校に寄贈され、金沢大学へと継承された。これが「高嶺三吉遺稿」である。高嶺の関心は主に西洋哲学にあり、フェノロサが行った哲学史講義のノート（英文）が「高嶺三吉遺稿」中の大部分を占めている。[13] 本資料は、表紙に「支那哲学・印度哲学・精神病学」とのシールが貼られた合冊本の中の「支那哲学」の部分に収録されている。「支那哲学」は次のような全五巻からなる。

①「明治十九年一月　支那哲学　巻一」
②「支那哲学　巻弐」[14]
③「明治十九年二月十二日　支那哲学　巻之参」
④「明治十九年十月一日綴之　帝国大学教授島田先生述　支那哲学講義　巻之壱」
⑤「明治廿年二月廿五日　支那哲学　巻弐」

これらのうち、本稿では①及び②を翻刻する。この部分は井上哲次郎の講義の記録と思われるからである。[15]

各部分の概要

次に、本資料①及び②の具体的な内容を確認する。①及び②の中でも、筆致や記録の特徴について差異が見られ、これらを更に分割して検討する必要がある。そこで、①と②をそれぞれを二つに分け、Ⅰ：①－1、Ⅱ：①－2、Ⅲ：②－1、Ⅳ：②－2とする。以下に各部分の概要を示す。

①－1は横書きの整った筆致で、ペンで記録されている。まず「性」と「道」について述べられ、性については孟子を画期とし、孟子以前としては『詩経』『書経』『論語』『中庸』等を、孟子以後については朱熹に至るまでの性論を簡潔に述べる。また道については、伝説的な「三墳五典」に言及し、そこでは「ナチュラル・ロー」（自然法）に相当する「天道」が述べられていたとする。次いで、道を論じた老子について、孔子との比較の視野を持ちながら論じる。

①－1の末尾では、「支那哲学総論」として「支那哲学」の時期区分が示される。それによれば、第一期（伏犠～東周）は「発達ノ世」であり、哲学の要素は「胚胎」されていたものの「混沌トシテ哲学分立セズ」といった状況であった。第二期（東周～秦）は「思弁ノ世」であり、「哲学」が栄え「新説新論最モ多シ」という時期であった。第三期（漢～唐・五代）は「継述ノ世」であり、秦の焚書、また漢代の儒学一尊により「哲学」は衰えた。第四期（宋～明）は「調停ノ世」であり、仏教の流行を背景に、儒学にも仏教の影響を受けた説が登場したが、結局はそれは旧説の「レコンサイル」（調和・調整）に過ぎなかった。第五期（清以降）は「考拠ノ世」であり新説はない。

①－2はペンによる縦書きに変わる。筆致はやや崩れる。ここでは儒学の概説が行われる。孔子の思想及び経歴、五経や『論語』等の主要テキスト、老荘と比較した際の孔子の学風の特徴が述べられており、また宋代の諸儒に加え、荻生徂徠と伊藤仁斎も言及されている。

②－1は毛筆による縦書きであり、筆致はかなり崩れる。ここでは主に孔子自身の思想について述べられる。「仁」「（天）命」「道」「政治」といったキーワードを単位として、『論語』等の文献を引用しながら、それぞれ解説を行っている。

②－2はペンによる縦書きである。引き続き孔子を論じており、その「利」及び「愛」について解説した上で、「欧学」との共通点、また「欧人」の孔子批評について言及している。その後は孔子以降の孔子学派の解説へと移り、子思（『中庸』）、孟子、荀子、揚雄の解説が続く。

円了本との比較

次に、本資料を円了本と比較する。円了本は和装本に右から左への縦書きで記録されている。「東洋哲学史　井上円了　井上哲次郎氏口述」との筆記から始まり、最初の数ページは「第○講」という表記のないまま連続した記述が続くが、「第四講」以降は講数が、「第五講」以降は講義の日付や当日の天候も記録される。また「第六講　一月十八日」の欄外には「論文題　論孔老二氏之学　二月十五日為期」と、[16] 中間課題と提出期限と思われるメモが見られることからも、円了が井上哲次郎の講義を、明治一五（一八八二）年末から翌年七月に掛けて、リアルタイムに近い形で記録したものと考えられる。

本資料と円了本を対応させると、次のようになる。①－1は、円了本に対応する記述がない。①－2は、円了本の冒頭から「第四講」の途中（一〇葉表）までとほぼ同内容である。②－1は、その直後から「第八講」の途中（二一葉表）までとほぼ同内容である。②－2は、その直後から円了本の最後すなわち「第十七講」の末尾までとほぼ同内容である。

ここで「ほぼ同内容である」とは、多少の異同はあるものの、議論の流れや引用される漢籍の内容はもちろん、文章表現もおおよそ一致していることを意味する。例えば、①－2の冒頭近くの一節について両者を比較すると次のようになる（傍線引用者）。

（高嶺）「孔孟ノ道は全ク二子ノ思考ニ出タルモノニアラス。其本ツクトコロハ唐虞禹湯文武ニアリト雖、二子ノ増舒附加スルモノ尠トセス。」

（円了本）「由来○孔孟ノ道ハ全ク二子ノ思考ニ出デタルモノニアラ

ス。其本ツク所ハ虞唐禹湯文武ニアリト雖トモ、二子ノ増飾附加スルモノ尠シトセス。」

そのため、本資料①－2から②－2までは、井上哲次郎の講義の記録であると考えられる。

次に、円了本に対応する部分のない①－1の内容の由来が問題となる。ところで『東京大学法理文三学部一覧』によれば、井上哲次郎は明治一五－一六年度と明治一六－一七年度の両年度において、助教授として「東洋哲学史」を講じる予定であったことになっている。[17]そこで、次のように考えることができる。井上哲次郎は、明治一五－一六年度の学期途中より講義を開始し、明治一六（一八八三）年七月を以て一旦は完結したものの、九月すなわち新学期から再び講義を開始した。その際、恐らくは前年度と重複する部分を含みながらも、①－1に相当する部分が新たに付け加えられた。つまり、井上哲次郎が自撰の年譜で明治一六（一八八三）年九月に「始めて東洋哲学史の講義を開く」としたのは誤りで、[18]実際には前年度より講義を始めていた。先述の松本源太郎は、そもそも松本の聴講自体が井上の記憶の誤りでないとすれば、明治一六（一八八三）年九月から初めて講義に参加したと考えられる。

①－1が井上哲次郎の講義であることを示すものとしては、まず先述の「支那哲学」の時期区分の問題を挙げることができる。町泉寿郎が指摘しているように、この時期区分は、井上哲次郎が留学から帰朝後に講じた「支那哲学史」講義において示された時期区分と一致する。[19]また、①－1では諸子百家と西洋の哲学者が比較されているが、これは留学後の講義においても同様であり、対応関係も多くの場合一致する。[20]更に、①－2に登場する医学書『誥道大素』の名前が①－1においても挙げられていることや、①－1の末尾に見える「周濂溪ハ　太極ヲ主トシ」以下とほぼ同様の部分が①－2の末尾にも見えること等からも、①－1は井上哲次郎の講義を記録したものと考えられる。

各部分の記録方法および特徴

最後に、各部分の記録方法について検討したい。まず言えることは、本資料には、講義を直接記録したものとは思い難い箇所が全体に渡って存在するということである。例えば、①－1には「列子力命篇」とすべき所を「列子ガ命篇」とした箇所等がある。また、①－2には「呉才老［＝呉棫］、朱晦菴両人」とすべき所を「呉才、老朱晦菴両人」と誤って区切った箇所等がある。また、②－1においても「日月」を「明」とした箇所や、②－2でも「矯」を「弓焉」とした箇所等がある。これらは、他人のノートを筆写した際に、漢学を専門としない高嶺ゆえの転写ミスが発生したものと考えられる。

そうであるならば、高嶺は誰のノートを写したのか。本資料の多くの部分が円了本とほとんど一致していることは先に述べたが、円了本を直接筆写したとは思われない。本資料では円了本未収録の①－1が冒頭に来ている上に、円了本に存在する記述が不自然に欠落している箇所もある（注(51)参照）。更に「日月」を「明」としたり、「矯」を「弓焉」とする等、縦書きの円了本を筆写したのであれば犯し難いような転写ミスが発生している。現時点での資料的制約の範囲内で推測するならば、次のように考えることができる。すなわち、円了本を母体のひとつとする、井上哲次郎が留学以前に行った講義を

記録したノート（おそらくは横書き）が当時学生の間で流通しており、高嶺はこれを筆写したのであって、①の表紙にある「明治一九年一月」とは、その筆写時期を示すものである。ただし、これは現時点では確実な資料的根拠を伴わない仮説に過ぎない。

凡例

○全体をⅠ：①－1、Ⅱ：①－2、Ⅲ：②－1、Ⅳ：②－2の四部に分けて示す。

○漢字は新字体に統一した。合略仮名「コト」「トキ」「シテ」等も、開いたカタカナ表記に統一した。

○ひらがな・カタカナの表記の揺れはそのままとした。

○読みやすさのため、翻刻者が適宜句読点を加えた。

○［　］内は翻刻者による補足を示す。【　】内は原資料で割注となっているものを示す。その他「　」及び（　）の括弧表記は原資料のままである。

○本資料では漢籍が多数引用されているが、字数の都合上、出典の紹介はごく一部に限定した。

○誤記や漢籍の写し間違いと思われる箇所には「ママ」と傍書し、必要に応じて［　］内に補った。

○原文の字下げや「○」等の記号の配置、書き損じによる訂正等は、可能な限り原文を再現した。ただし行の末尾において、改行したのか或いは次の行まで連続して記述しているのかが不明な場合には、適宜翻刻者が判断して改行した。

本文

Ⅰ：①－1

○性論

孟子以前性論ノ端緒

詩大雅烝民　天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿徳。

易繫辞　一陰一陽之謂道、継之者善也、成之者性也。

書湯誥　性皇上帝、降衷于下民。若有恒性、克綏［厥］猶惟后。（ママ）

論語　性相近［也］、習相遠也。

中庸　天之命之謂性、順性之謂道。（ママ）（ママ）

性善ノ元祖ハ孟子ナリ。

其言ニ云ク　人性之善也、猶水之就下也。

又　牛山之木嘗美矣云々。

又外書ニ　有善無悪天也、有善有悪人也。

又云　人之性善、今人之性不善、皆失喪其性故也。

次孟者ハ荀子ナリ。

其言ニ云ク　性悪也（原告子杞柳之喩カ）。

其次ハ　董仲舒ナリ。

其言ニ云ク　性陽情陰也（和解孟荀）。

第四ハ　劉向ナリ。

其言ニ云ク　性情相応也。

第五ハ　楊雄[21]ナリ。

其言ニ云ク　性善悪相混也（原告子端水之喩カ）。

第六ハ　韓子ナリ。

其言ニ云ク　性有三品（原孔上知与下愚不移之言一折二孟荀一）。

第七ハ　李習之翺ナリ。

其言ニ云ク　務復性（顕老荘淮南子）。
第八ハ　蘇子瞻［蘇軾］ナリ。
其言ニ云ク　性未有善悪也。
第九ハ　胡五峯［胡宏］ナリ。
其言ニ云ク　性無善悪也。
第十ハ　程子ナリ。明道伊川（二程全書）
其言ニ云ク　性有本然気質也（三宅尚斎訳二程之説）。
其后張子朱子、程子ノ説ヲ承ク。
本然気質ノ論ハ程張ニ始マリ朱子之ヲ継グ。蓋シ孔孟ノ両説ヲ調和スル者。
其意、本然ノ性ハ明白ナレドモ気質ノ性ニ掩ハレテ時ニ暗シ。故ニ気質ノ性ヲ矯メテ本然ノ性ニ復スルヲ修身ノ本ト為ス。此論程明道ノ論中ニ見ヘズ。而シテ程伊川専ラ之ヲ唱ヘ、朱子之ヲ和シ、諸学者皆之ヲ用ユルニ至ル。陳北溪、薛敬軒、胡敬斎等ノ諸氏之ヲ奉ズ。

○比対

孟子ノ良心ハ「コンセンス」［Conscience］ニ当ル。其「コンセンス」ヲ以テ教ヲ立ルハ性善家ニ同ジ。又性悪者ハ其「コンセンス」ヲ取ラザルヲ以テ泰西ノ「ロック」派ノ論ニ類ス。
程朱ノ論モ希臘時代ニ之ヲ唱フル者アリ。
「ライプニッツ」ノ「モナッド」論モ人ノ善悪ハ本来定マレル者ト云フ見アルガ如シ。
泰西「コンセンス」ヲ唱ス者「リード」［Reid］等ノ風ナリ。
又中古「プロテナス」［Plotinus］ナル者アリ。本来ノ有様ニ帰ヘルコトヲ唱ヘ李氏ノ復性説ニ似タリ。

○道

六経以前ノ書信偽未ダ知ルベカラズト雖トモ、黄帝内経等アリ。
誥道大素[22]ノ説ニ拠レバ、三皇ノ書ノ如キハ大道ヲ論ゼル者ナリ。
大道トハ天道ノ謂ナリ。天道トハ蓋シ「ナチュラル、ロー」ナラン。其他人道地道ノ二アリ。地道ハ天道ニ因リ人道ハ地道ニ因ル。
孔孟ノ道ハ人道ニ過ギズ。故ニ道ノ本原ヲ索ムルニハ六経ヲ以テスベカラズ。黄帝内経ノ類ヲ以テスベシ。是誥道ノ論ナリ。
古書ニ三墳五典ノ名アリ（左伝荘公十二年[23]）。
周礼ニ外史掌三皇五帝之書トアリ。
孔安国ノ云ク

伏羲神農黄帝之書、謂之三墳、言大道也。少昊顓頊高辛唐虞之書、謂之五典、言常道也。

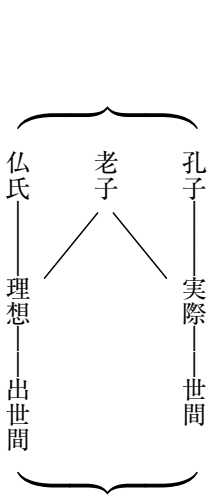
襄元周礼ヲ注シテ、三皇五帝ノ書ハ左伝ノ所謂三墳五典ナリトス。
若シ孔安国ノ説ヲシテ真ナラシメバ書ノ堯舜二典ハ五典ノ残リタル者ナラン。此ニ種々ノ異論アリ。
然ルニ今世ニ伝フル古三墳ト称スル者アリ。山墳、気墳、形墳アリ。此書真贋未ダ知ルベカラズ。第一ニ伏犠ノ連山ヲ論シ、第二神農ノ気象ヲ論ジ、第三ニ黄帝ノ乾坤ヲ論ズ。
老子ハ虚無恬澹ヲ説ク。
老子ハ孔子ト同ジク述而不作ヲ主トス。或云、老子ノ説ク所ハ皆容成ノ言ナリ。或云老子ヲ以テ偽作ノ者ト為ス。然レドモ其文古色ヲ帯ビ秦漢以後ノ作ニ非ズ。老子ノ年代未詳ナリ。或ハ斯レ人ナシト云ヒ。或ハ荘子ノ仮設スル所ト云フ。
其書上下両篇章数定マ［ラ］ズ。故ニ
韓非子ハ　五十五章ニ分チ、

何上公ハ　八十一〃　〃
孔穎達ハ　六十四〃　〃
呉艸廬ハ　六十八〃　〃
厳君尹ハ　七十二〃　〃
其他諸氏ノ分別アリ。
近世ハ何上公ニ従ヒ、

上篇三十七章　下篇四十四章
合計八十一章

論語ニ老彭トアルハ老子ナリト云フ者アリ。史記ニ老萊子又ハ大史儋ハ即チ老子ナリト云フ。
老子ノ事跡怪誕多キハ其人ヲ神ニスルガ為ナリ。
老子中、混生篇ヲ肝要トス。
老子ノ意　天地ニ先テ一物アリ、自生自立周行シテ至ラザル処ナシ。之ヲ道ト云フ。天地ノ蘊々トシテ無象ノ形容ナリ。天地未判ノ時ヲ指シテ道トシ。此象ニ則リテ人ハ道ヲ立テ人心ノ未動ノ時ニ復帰セシメントス。故ニ仁義ヲ捨テ無名ヲ道トス。
老子ノ道　理想ノ道ニシテ今ノ「ユニバルサル、ロー」則チ理法ナリ。孔子ノ道ハ人倫ニ止マリ老子ノ道ハ理法ナリトスベシ（第一章）
道ハ名状スベカラザル者ナレド名状セザレバ人ニ示ス能ハズ。故ニ之ヲ説キテ種々ニ顕ハス（第二十一章、第二十五章、第三十四章）。西洋人老子ヲ評シテ「オブスキュアリスム」[Obscurantism: 反啓蒙主義、愚民政策]ト云フ。蓋シ老子ノ絶学無憂等ヲ説クニヨル。老子ノ無為ヲ説ケルハ盛衰ノ理ヲ知リ之ヲ避ケントスル者ノ如シ。易ノ理ニ本ツキ（栄枯循環等ノ理）盛ナレバ衰ヘ盈レバ虧ク。天道ハ盛ヲ損シ満ヲ減ズ。故ニ人亦此理ニ従ハザルベカラズト思ヘルナラン。以テ老子ノ道ハ天ニ本クヲ知ルベシ。
老子ガ政事上ノ考ハ人民ヲシテ[24]競争奢侈ノ念ヲ断チ無為無欲ナラシメントスルニアリ。人民ヲ治ムル者モ無為ニシテ自化セシムルニアリ。其主義少シモ関渉ヲ用ヒズ所謂任他主義ナリ。
然レドモ其門ニ属スル者ニ束縛ヲ旨トスル者アルハ、老子ノ文中百姓ヲ愚ニシ子供ニシテ治ムルノ意ヨリ転化シ来ルナリ。其本意ハ無為ヲ以テ政治ヲ為シ修身ヲ立ツ。故ニ戦争ノ如キハ最モ不祥トスル所ナリ。此旨ヲ申ブレバ権謀術数ノ義アリ。故ニ其后、韓非申不害ノ如キ法家起ル。
老子ノ教仏氏ニ似タル所アリ。老子ノ無名ハ仏氏ノ真如ニ似タリ。老子ノ無為澹淡ハ仏氏ノ虚無寂滅ニ似タリ。老子ニ退歩スルノ勢アレバ仏氏ニ忘念ヲ絶テ清浄ヲ守ルニ同ジ。老子ノ無為ハ仏ノ三昧ニ等シ。老子ノ死而不亡者寿ト云ヒ荘子ノ不死不生ハ仏ノ不生不滅ニ同ジ。老子ノ非以［其］無私邪、故能成其私ハ仏ノ真空実有ト同ジ。其他種々類似スル所アリ。朱子仏書中老荘ニ拠リテ作ル者アリト云ヘド是固ヨリ僻説ノミ。
老子ノ仏氏ニ異ナルハ無ヲ以テ有ヲ廃セズ。実ヲ捨テズ。念欲ノ根ヲ断ツニ非ズ。一半ハ理想ヲ取リ一半ハ実際ヲ取リ。理ト実ト両存スルノ意アリ。二者ヲ結合セントスルノ意ナリ。有ハ無ヨリ始ルト云フト雖モ、有ノナキヲ唱フルニ非ズ。今ハ有ニシテ古ハ無ナリ。而シテ今ノ有ヲ転ジテ本源ノ無ニ復帰セントスルナリ。
然ルニ仏氏ハ実際ヲ全廃シテ純然理想ノ境界ニ入ル者ナリ。是朱子ノ評スル所ナリ。之ヲ合解スルニ、孔子ハ実際ヲ旨トシ仏氏ハ理想ニ限リ。而シテ老子ハ其中間ニ在リテ内外両有スルナリ。（此

評中仏氏ノ段ハ天台宗ノ立ツル所ニ非ズ）。



日本ニテ老荘ヲ学ブ者甚ダ少シ。只廬雪東其他二三人アリ。

孔老二子ノ天ト曰フ者ハ別ナル者ニ非ズ。

二氏ノ異ナル所アリシハ孔子ハ「マレタリート」[materialism（実利主義・物質主義）か]ニシテ老子ハ半「アイデアリズム」[idealism：理想主義]ナリ。老子ハ出世間ヨリ教ヲ立テ孔子ハ世間ヨリ教ヲ立ツ。老子ハ陰道ニシテ孔子ハ陽道ナリ。老子ハ退歩ニシテ孔子ハ進修ナリ。老子ハ自然ニ任ジ孔子ハ人為ヲ以テ身ヲ修ム。孔子ハ時ノ政教ニ関シ老子ハ然ラズ。孔子ハ仁ヲ旨トシテ民ヲ愛シ老子ハ仁ヲ舎テ、百姓ヲ芻狗ト為ス。孔子ハ世間中ニ在リテ人ニ拠セントシ老子ハ世間外ニ出デ、本心ヲ全フセントスルナリ。

老子ノ道ハ理想界ニアルヲ以テ孔子ノ道ニ比スレバ頗ル高妙ナリトス。然レドモ老子ノ哲学ハ其難破スベキ点孔子ノ哲学ヨリ多シ。且ツ老子ノ教ハ行フベカラザル点亦多シ。其教中ノ退歩主義ノ如キ今日ノ世潮ヨリ考フレバ行レザル者ナリ。（世人皆云フ、独リ孔子ノ難破スベキ点少ナシト。是其浅近ナルニ因ル。）

老子仁義ヲ賤メドモ其書末ニ三宝ヲ立ツ。其一ヲ慈トス。慈ノ仁ト異ナル如何。且ツ老子ハ絶学無憂ト曰ト雖モ、学ニ非レバ憂ナキコトヲ知ル能ハズ。又仁者不弁ト曰ト雖ドモ、其之ヲ言フ既ニ弁スル者ニ非ズヤ。其他知者不言、言者不知ト曰ト雖モ、老子自カラ五千言ヲ並べ立テタルニ非ズヤ。白居易之ヲ嗤フテ曰ク、

言者不知知者黙、此言吾聞於老君、
若道老君是知者、縁何日著五千文。[26]

此ノ如ク矛盾多シ。

老学後ニ分レテ法家ト道家ト為ル。法家ハ以百姓為芻狗云々ノ語ニ原ヅキク。其三十六章ニ云フ、国ノ利器ハ以テ人ニ示スベカラズ。又法家ノ取テ以テ教ト為ス所ナリ。然レドモ法家ノ悉ク老子ヨリ起ルトハ云ヒ難シ。道家ハ全ク老子ノ虚無澹淡ヲ取ル者ナリ。之ヲ承伝スル人甚ダ少シ。其後仙家起ル。多少老子ト異ナレドモ生ヲ養ヒ寿ヲ求ムルヲ本トス［ト］云フ。其本源ハ未詳ナリ。古書中仙字見ヘズ。列子韓非子中ニ其台見ユト雖ドモ、秦ニ至リテ始メテ此説ヲ信ジタル者アリ。漢ニ至リテ劉向ノ列仙伝等アリ又三道経等アリ。要スルニ仙家ハ漢ニ起リ晋ニ行ハレ唐ニ盛ナリ。宋以下ハ格別盛ナラズト見ユ。

法家
老子教　道家
仙家

道家ノ書ニハ［紫清］指玄集、真誥、抱朴子、太上感応篇、呂祖全書、参同契、陰符経、道徳指帰等アリ。

○支那哲学総論

支那哲学ヲ分テ五期トス。第一期ハ三皇五帝ヨリ東周ニ至ル。即チ左ノ如シ。

第一期　伏羲ヨリ東周ニ至ル
〃二〃　東周　〃秦　〃
〃三〃　漢　〃唐五代〃
〃四〃　宋　〃明　〃
〃五〃　清以后
第一期　発達ノ世
〃二〃　思弁　〃
〃三〃　継述　〃
〃四〃　調停　〃
〃五〃　老拠（ママ）　〃

支那哲学ハ孔老ノ時ニ起ルト雖ドモ、其已前既ニ胚胎スル者アリ。之ヲ発達ノ世ノ云フ（ママ）。此時三墳五典ノ書アリト雖ドモ未詳。黄帝内経、陰符経、風后握奇経、鬻子等ノ書アリ。陰符経ハ今伝ハル者或ハ李候（ママ）ノ偽作ナリト云フ者アリ。其他此等ノ書ハ太抵偽作ナラン。子類中最モ古ナル者ハ鬻子ナリ。右ノ外古キ者ハ尚書ナリ。是古代ノ史記ニシテ哲学ヲ述ベタル者ニ非ズ。併シ孔子ノ哲学ハ此書中ヨリ出ヅル所多シ。（尚書ハ後ニ書キタル者ナレバ其首ニ稽古ノ二字ヲ置ク）。

汲冢周書アレドモ后人ノ偽作ナルベシ。

易ト云フ書アレドモ古人ノ者ト異ナリト云フ者アリ。其他種々ノ書アレドモ真偽未詳。然レドモ此第一世ニ哲学ノ胚胎セルハ疑ナシ。（周礼爾雅モ哲学ノ書ニ非ズ）。周易ハ其原旧キ者ナレドモ孔子之ヲ大成スルヲ以テ孔子ノ哲学ニ属ス。（易ニ三伝アリ。連山帰蔵ノ書伝ハラズ）。

春秋戦国ニハ種々哲学起ル。

秦漢以後ハ前世期ノ哲学ヲ承ケ継グノミニテ創立ノ説ナシ。

宋以後ハ哲学ノ新説起ルト雖モ、是ハ仏教ノ盛ナルニ遇ヒ其ガ為メ一時新説ノ起リタルナラン。然レドモ其説皆旧説ヲ「レコンサイル」[reconcile：調和・調整]スルニ過ギザレバ之ヲ名ケテ調停ノ世ト曰フ。

宋以後ハ三教一致ノ説アリ。林兆恩[27]。陶宗儀等ノ諸氏之ヲ唱フ。

清以後ハ古書ヲ引用スルノミニテ新造ノ説ナシ。故ニ之ヲ考拠ノ世ト曰フ。

◯第二期
孔子仁ヲ説キ、
孟子仁義性善ヲ説キ、
荀子性悪ヲ説キ、
老荘虚無怙澹ヲ説キ、
楊墨一家ノ説ヲ起シ、
管商　功利
申韓　刑名
蘇張　弁舌
孫呉　兵法
公孫鄧析　弁論
扁鵲文摯　医術
鶡冠子
屈子
晏子
呂子
文子

亢倉関尹子

右諸氏ノ説西洋ト合スル者ヲ挙グレバ、

第一。老子ノ「道生一、一生二、二生三、三生万物」及ビ荘子ノ「一与言為二、二与一為三、自此以後巧歴不能得」ハ「ゼノー」[Zeno]氏ノ「一即万有ノ説ニ合ズ。

第二。関尹子ノ「爪之生、髪ノ長栄云々」及ビ列子ノ「凡所見亦恒見其変」ト云ハ「ヘラクリタス」[Heraclitus]氏ガ転化説ニ近シ。

第三。老子ノ「同出而異名、同謂之玄」ハ「ヘーゲル」氏ノ絶対説ニ近シ。

第四。関君子ノ「無一物非神、無一物非玄」及ビ荘子ノ「知止其所不知至矣」ト云フノ類ハ「スペンセル」[Spencer]氏ノ不可知的ノ意ニ近シ。

第五。関尹子四符篇ニ「以我之精合天地万物之精云々」ハ「プラトー」[Plato]「セルリング」[Schelling]諸氏ノ所謂万有精神ニ似タリ。

第六。楊朱篇ニ「凡生之難遇、而死之易及云々」及ビ「人之生也、奚為哉、奚楽哉、為美厚爾、為声色爾」ト云フハ「デモクリタス」[Democritus]「アリストウトル」[Aristotle]「エピキュラス」[Epicurus]諸氏ノ快楽主義并ニ「ゴンヂヤック」[Condillac]「ヘルヴェシアス」[Helvétius]諸氏ノ感覚主義ニ同ジ。

第七。荘子ノ「彼出於是、是亦由彼」ト云フハ「スペンセル」氏ノ智識相対論ニ同ジ。

第八。易ノ繫辞ニ「天地絪蘊、万物化醇」ト云ヒ荘子ノ「若人之形者、万化而未始有極［也］」ト云フハ「ダーウィン」氏ガ化醇論ヲ述ブル如シ。

第九。列子ガ命篇[28]ニ「生々死々、非物非我、皆命也。智之所無奈何」ト云フハ「ホッブス」「ロック」「フピノザ」「ライプニッツ」「ミル」諸氏ノ必然論ニ同ジ。

第十。墨子非命篇上ニ「世未易、民未渝乃至可謂有命哉」ト云フハ「クラーク」[Clarke]「プライス」[Price]「リード」「テルチュリアン」[Tertullianus]諸氏ノ唱フル自由意志論ニ似タリ。

第十一。孟子尽心上「居移気養移体」ト云フハ「ボックル」[Buckle]氏ノ風土感化論ニ同ジ。

第十二。関尹子ニ「吾之精一滴無存亡爾、吾之神一欵無起滅爾」ト云ヒ列子天瑞篇ニ「死之与生一往一反。故死於是者安知不生於彼」ト云ヒ荘子養生篇ニ「指窮於為薪、火伝也、不知其尽也」ト云フハ「ピサゴラス」「ソクラテス」諸氏ノ精神不滅論ニ近シ。

墨子ノ天鬼、列子ノ疑独、荘子ノ真宰、公孫子ノ独正、鶡冠子ノ泰鴻。

此等ハ「アナキサゴラス」氏万有睿智若シクハ「セルリング」氏ノ絶対ニ類スルガ如シ。

易ノ太極　老子ノ谷神

右ハ「スペノザ」氏ノ万有本体「スペンセル」氏ノ不可知的ニ同ジ。

其他

孔子　利他主義
楊子　自利主義
墨子　兼愛主義
老荘　放任主義
申韓　干渉主義

管商　功利主義

○第三期

秦以後西漢ニ入リテ哲学ノ漸ク衰ヘタル源因ヲ挙グルニ、

第一。秦ノ書ヲ焚キ、後人ヲシテ先輩ノ思想ヲ知ルノ便ヲ失ハシメルコト。

第二。孔ノ教ノミ其勢力ヲ回復セルコト。

（一ハ反動ノ力ニ依ル。反動ハ一ノ理法ナリ。且又新ノ后又漢ノアルニモ依ル）。人ノ思想ノ発達ハ先輩ノ書ニ因ル者多キヲ以テ、其書ヲ焼失シタル時ハ思想ノ進歩ニ害アル勿論ナリ。次ニ諸説相競争シテコソ智力発達スルナレ、然ルニ今ヤ一種ノ説ノミ行ハル、ハ甚ダ害アリ。孔子一派ノ教ノ流行スルヲ以テ社会ノ進歩ヲ害セル知ルベシ。

第三期中ノ有名ノ人々ヲ挙グレバ、

董仲舒　淮南子

楊雄　王通

韓愈

以上ヲ最トス。

王充

之ニ次グ。

劉向　班固

賈誼　陸費

劉勰　葛洪

又之ニ次グ。

司馬相如　司馬遷

枚乗　曹植

陸機　沈約

柳完元

右諸氏ハ格別哲学ニ関シタルコトナシ。

劉熙　高誘

馬融　張堪［張湛］

鄭玄　趙岐

応劭　韋昭

王粛　王弼

何晏　杜預

白秀［向秀］　郭璞

顔師古　呂尚

陸徳明

是又新説ヲ出シタルコトナシ。

董仲舒、楊雄ノ如キモ古ヲ述ベ新ニ説ク者ニ非ズ。故ニ之ヲ継述ノ世ト名ツク。

○第四期

宋以下哲学大ニ復興ス。

周濂溪―周子

張横渠―張子

邵康節―邵子

程明道―程子二

程伊川

楊亀山［楊時］　司馬温公［司馬光］

羅仲素［羅従彦］　陸象山

朱晦菴―朱子

張南軒［張栻］　黄勉斎［黄榦］
真西山［真徳秀］

其他

欧陽脩　胡安国
蘇老泉　蘇東坡
王深寧［王応麟］　陳龍川［陳亮］

今諸氏一時ニ輩出シテ文教大ニ興ル。

其源因　仏教外ヨリ刺戟セルコト。蓋唐宋ノ間仏氏ノ教大ニ行ハレタルヲ以テ儒者之ヲ誹謗スル者多シ。程朱其他ノ宋儒ハ陽ニ仏ヲ非トシテ陰ニ其説ノ高妙ナル所ヲ取リ孔子ノ欠所ヲ補ハントス。故ニ口ニハ孔子ヲ崇尚スレドモ其実儒仏二教ヲ調停セル者ト謂フベシ。

宋儒中仏ヲ学ビタル者アルノミナラズ、其書中仏書ヨリ取リ用ユル所ノ語少ト為サズ。

要スルニ第四期ハ釈老二氏ノ長所ヲ取リテ儒家ノ短ヲ補ヒ以テ三教調停ヲ為サントスルニ在リ。三教一致論モ是ヨリ起ル。宋以下明ニ至ルマデ此傾向アリ。即チ、

元ノ　許魯斎［許衡］　金仁山［金履祥］
呉草廬［呉澄］
明ノ　薛敬軒［薛瑄］　胡敬斎［胡居仁］
陳白沙［陳献章］　程篁墩［程敏政］
蔡虚斎［蔡清］　王陽明

皆宋儒一般ノ説ヲ為スノミ。

明ノ　楊升菴［楊慎］

亦然リ。

元ノ　陶宗儀
明ノ　林兆恩

右二氏三教一致ヲ唱フ。其意文中子ノ三教於是乎可一矣ト云フニ本クモ亦調停ノ説ノミ。

◯第五期

考拠ノ学盛ニシテ一種ノ哲学起ラザル也。

以上ヲ総論スレバ

第一期　渾沌トシテ哲学分立セズ。

第二期　新説新論最モ多シ。

第三期　当時調停ヲ主トスレドモ其道ヲ論ズル学派不一。

周濂溪ハ　太極ヲ主トシ、
程明道ハ　気、
程伊川ハ　理、
邵康節ハ　数、
張横渠ハ　大虚、
陸象山ハ　心、
朱晦庵ハ　理ト心、
王陽明ハ　良心、

故ニ第四期ハ第二期ニ次キ第三期ニ次グ者トシ。[29] 第五期ハ最モ哲学ニ乏シク。第一期ニモ及バストス。

Ⅱ：①－2

儒学

義解　儒ニ二義アリ。一ハ孔孟ノ道ヲ学ブ者ヲ云ヒ、二ハ総シテ諸学ニ通スルモノヲ義トス。

爰ニ儒学ト云ハ孔孟ノ学ヲ指ス。
孔孟ノ道は全ク二子ノ思考ニ出タルモノニアラス。其本ツクトコロハ唐虞禹湯文武ニアリト雖、二子ノ増舒附加スルモノ尠トセス。
引証　孔子ノ堯舜文武ヲ祖述シタル証ヲ引ナリ。
中庸云　仲尼祖述堯舜、憲章文武。
論語云　述而不作、信而好古。
然レトモ二帝三王ハ孔子ニ処[30]テ始テ世ニ顕ハル、モノト知ルヘシ。
孟子ハ孔子ヲ祖述シタルモノナリ。
斯ク孔子ハ二帝三王ノ道ヲ祖述スルモノナルヲ以テ其教ノ本体ヲ探ルハ書経ヨリ外ハナシ。
教体◯孔子ノ道は決シテ純粋ノ哲学ト云ベカラス。全ク修身ノ一学ヲ本トスルモノナリ。旁ラ政治ヲ談シ宗教ヲ説クニ過キス。其政治モ宗教モ皆修身ニ基テ立ルモノナリ。
引証
書経　堯命堯舜曰、允執厥中。
又　舜命禹曰、人心惟危、道心惟微。
惟精惟一、允執厥中。【以上二章ニ依テ中庸ノ事起ル】
又　舜命啓曰、敬敷五欲(ママ)在寛。
以上人倫ノ道ヲ説ク。
書経　舜命伯曰、夙夜惟寅、直哉惟精(ママ)。
又　又命燕曰、直而温、寛而栗云々。
以上、修身ノ道ナルヲ証ス。
然シテ孔子ハ修身道徳ノ本ヲ天ニ反[31]シ以宗教ノ理ヲ説ク。其書中ニ天災地変アル毎ニ天ヲ敬スル例少ナラス。
引証　舜命禹曰、天之暦数在爾躬。
又　四海困窮、天禄永終。
然レトモ孔子ノ天ヲ談スルハ蒼々タル天ヲ言フニモアラス又鬼神ニモアラス。凡テ災禍アレハ其身ヲ慎ムヲ以テ天ヲ敬スル者トス。知ルヘシ其宗教ノ本全ク修身ニ拠ルモノナルヲ。是ニ由テ考レハ孔子ノ教即チ禹湯文武ノ道ハ只世ノ道、人ノ教ヲ説クモノニシテ希臘
[原資料ではここで改ページ。新ページ左端に「之ヨリ左ヨリ右ニ」とあり、以降Ⅱの終わりまで、縦書きではあるが左から右へと書き進められている。翻刻に際しては、引き続き右から左に書き進める。]
学者ノ如ク、天地ノ現象ヲ究メ人生ノ真理ナドヲ証スル者ニアラス。
史伝◯孔子ノ在世ハ希臘ノ「ピサゴラス」ト其時ヲ同フス。孔子道ヲ老子ニ問フノ事ハ尤モ怪ムヘシ。老子ハ何時代ノ人ナルヤ未詳。或ハ言フ孔子ノ後ナリト。而シテ其二子ノ教全ク相反セリ。決シテ師弟ノ因アル(ヘキ)モノニアラス。此事ハ荘子ニ見ユト雖、荘子ハ老子ヲ尊崇スル寓言ナレハ信スヘカラス。礼記ニ聞諸老聃トアリト雖老聃ハ大考(ママ)寿ノ名ナリト云フ。然レハ老聃ト云モ一老人ト云ニ過キス。又論語ニ窃比［於］我老彭トアレトモ老彭ハ必シモ老子ナラス。此両子ハ全ク師弟ノ関係ナキモノナル所以ハ左ノ書[32]ニ就テ見ルヘシ。
詹雪崖［詹陵］、異端弁正、斎藤拙堂、老子弁、
孔子ノ伝ノ詳ナルハ聖門人物志ニ就而見ルヘシ。
遺書◯孔子ノ直作ニテハ六経【今ハ楽記亡シテ五経トナル】
他人ノ手ニナルモノハ孝経、大学、中庸、論語、
古書参考書目
老子、荘子、韓非子、墨子、楊子、孟子、荀子、鶡冠子、関尹子、鬼谷子、亢倉子、子華子、鬻子(々)、公孫子、申子(々)、立子、尹文子、

黄石子、列子、淮南子、学律討原[33]、十子全書、誥道大素【海律子享
黄帝内聖[34]ヲ論シタルモノナリ。
陰符経【黄帝ノ書ナリト伝フ　真偽不可知】
黄帝内経
黄帝宅経偽作ナラン
左四書[35]ハ黄帝ノ教ヲ論シタルモノナリ
礼記ハ孔子ノ真作ニアラス。胡文煥ノ事物起原ノ中ニ、月令ハ呂不韋、王制ハ漢文帝、中庸ハ思子子思、大学ハ曾子、緇衣ハ公孫尼子、楽記ハ公孫洪ノ作ナリト言リ。
易ト春秋ハ孔子ノ真刪ニ出ルモノナリ。
詩経モ孔子ノ親撰ナリ。
書経ハ尽ク孔子ノ手ニ成ルニアラス。後人ノ増補ナキヲ保シ難シ。昔時ハ逸書廿四篇之レニ附属セシガ王粛ヲ之ヲ削リ増多二十五篇ヲ加テ書経トナスト云フ。其后呉才、老朱晦菴両人ハ書経ヲ以テ贋作トナス。之ニ反シテ真作トナスコトアリ。[36][37]
孝経秦火ニ由テ亡失シ漢ノ時代ニ再ヒ顕ハル。
孝経ニ二種アリ。今文孝経ハ河間顔芝始テ之ヲ世ニ伝フ。其中ニ十八章アリ。其外ニ孔子ノ壁ヲ毀テ得タル一経アリ。之ヲ古文孝経ト云フ魯恭王ノ時。孔安国之ヲ註ス。此本経ハ支那ニ亡ヒ隋[38]ノ時新ニ之ヲ作ル。然レトモ其物日本ニ伝ハルヲ以テ遂ニ支那ニ入ル。
大学ハ種々ノ説アリ。朱子ノ説ニテハ経ハ曾子ノ編スルモノニシテ其他ハ門人ノ集ムル所ト言フ。之ニ反対スル論者中ニ陸深、李衮、羅汝虎芳、陳耀文、樊良枢、朱彝尊、等アリ。其是非知ルヘカラスト雖、経ト伝ハ作者異ナルコト明ナリ。要スルニ編者不詳トスヘシ。此篇ハ本ト礼記ノ一篇ナルニ程子之ヲ撰ヒ大学中庸ニ分ツ。其后朱子之ヲ註シテ四書ノ中ニ加ヘタリ。
論語○此書ハ三種アリ。一ニ魯論【二十篇。今伝ハルモノナルヘシ。然レトモ今日ノ書ハ此三論ヲ混スルモノナルヘシト云フ】二ニ斉論【二十二篇。問王、知道ノ二篇多シ】三ニ古論【二十一篇。堯曰ノ篇ヲ二篇章ニ分ツ】
該書ハ程子ノ説ニテハ有子。曾子ノ門人ノ手ニナルト云フ。其故ハ有曾二子ニ子ノ字ヲ用テアリ。然レトモ曾子有子ト称スルコトハ他書ニ往々見ヘタリ。然レハ当時両人ニ限リ子ヲ用ヒシカモ計カタシ。非孟堅［班孟堅（班固）］ノ説ニハ門人ノ集ムルモノナリト云フ。
鄭康成［鄭玄］ノ説ニハ中弓、子遊、子夏トモ云フ。
柳子厚［柳宗元］ハ楽成子春、子思ナリト云フ。[39]要スルニ論語ハ孔子ノ自選ニアラサルコト明ナレトモ作者ハ不詳ト知ルヘシ。然レトモ此書ハ決シテ後世ノ偽作ニアラサルコト亦明ナリ。【伊藤仁斎ノ此書ノミヲ用ヒシハ之レカ為ナリ】
古代閭世間ニ行ハレタルモノハ詩経書経ニシテ、漢以来孝経、易、春秋ヲ尊用シテ未タ論語ヲ尊重スルヲ聞カス。唐ノ諺ニ小児学問止論語ト云フコトアルヲ見レハ、此時代世人論語ヲ賤ミタルヲ知ルヘシ。其尊崇ヲ得タルハ宋ヨリ始マルト知ルヘシ。【程子ヲ以テ始トス】
家語○古人ノ言ニ論語ハ雅馴ニシテ家語ハ騁駁[40]
純　之ヲ信用セシト雖、決シテ信拠スヘカラス。
孔子ノ事ヲ脱[41]スルニハ説苑、新序、孔聚子、春秋繁露等ヲ参考スヘシ。
学風○老荘ノ学ハ概シテ之ヲ論スレハ社会ニ関スルコトナクシテ世間外ニ真理ヲ尋ヌルノ風アリト雖、孔孟ノ学風ハ世態人情ヲ本トシ之ニ由テ教ヲ設ケ理ヲ尋ヌルモノト知ルヘシ。故ニ老荘ノ学ノ本トシテ論スル所ハ虚無淡泊ニアリ。孔子ノ教ニハ天地道、地道、人道

トノ三アレトモ、其主トスル所ハ人道ニアリ。荘老ハ天道ヲ本トス。是両学ノ由テ異ナル所以ナリ。支那学ノ西洋ニ異ナル一端ハ天地ノ思想ナリ。易曰法象莫大乎天地トアリテ、天地一体ノ有様ヲ象リテ之ニ倣テ人ノ行為ヲ施コスモノト信ス。是レ則荘老ノ虚無淡泊ノ起ル所以ナリ。孔孟ニモ又此考アリテ唯天地ヲ象リテ而シテ其力ニ付テ論スルコトナシ。両学共天地ヲ談スルト雖、孔孟ハ之ヲ人事ニ止ムルノミ。孔孟子ノ天ヲ談セサルコトハ論語中ニ明ナリ。

引証

第一、子不語怪力乱神。

第二、君子於其所不知、蓋闕如也。

第三、索隠行怪、後世有述焉、吾弗為之矣。

第四、未能事人焉能事鬼。

第五、未知生焉知死。

第六、敬鬼神而遠之。

然レトモ老荘ノ学風ハ怪力乱神ヲ語リ知ラサルトコロヲ論スルモノトス。支那人故曰、道ハ白璧ノ如ク儒ハ五穀ノ如シトス。[42]

老荘ノ書ハ通暁シガタク孔孟ノ書ハ了解シ易シ。是ニ由テ学者皆孔孟ヲ賛ケテ老荘ヲ退ク。

薛敬軒云、聖覽之言坦易而明白、異端之言崎嶇而茫昧。[43]

孔孟ノ学ハ人事ニ関スルヲ以テ進修スルノ風アリ。

老荘ノ学ハ無為ヲ談シテ世間ヲ離ルヽヲ以テ退守ノ風アリ。

引証　孔子曰　為有用我者、朞月而已可也、三年有成。

又曰、如有用我者、吾其為東周乎。

又曰、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。

是ヲ以テ孔子ノ教タル社会ノ進遷ニ従テ改修スル風アルハ明ナリ。

是又世人ノ孔子ノ学ヲ用ユルモノ多キ所以也。

論法【孔学論法】○孔子ハ述テ作ラサルヲ主トスルヲ以テ、其論スルトコロ皆ナ古人先王ヲ祖述スルモノナリ。故ニ

故ニ事実ヲ探リ、例ヲ尋テ一種ノ真理ヲ証明スルニアラス。列子、荘子ニ至リテハ稍ヤ例ヲ挙ケテ事ヲ微スルノ風アリ。[44]要スルニ孔子ハ所謂論法ナルモノヲ用ヰサルモノト知ルヘシ。

学体○孔子ノ道学ハ純正ノ哲学ニアラスシテ帰スル所修身ノ一部ニアリ。孔子ノ教ヲ談スルヤ、人ノ機ニ応シ性ニ従テ其主義ヲ異ニスル故ニ其経ニ論スルトコロ多少ノ異同アリテ、孝経大学中庸礼記論語、皆論旨ヲ異ニス。

孝経ノ原理ハ孝ナリ。

大学ノ原理ハ修身誠意等ナリ。

中庸ノ原理ハ中庸又智仁勇ナリ。

論語ノ原理ハ仁或義或孝悌或敬或文行忠信。

斯ク書ニ由テ其原理ヲ異ニスルヲ以テ後世学派ノ数派ニ分ルヽニ至ル。[45]周子—主太極、程明道—主気、程伊川—主理、邵子—主数、張子—主大虚、陸子—主心、朱子—主理与心、物徂徠—主礼楽、伊藤仁斉—主仁義。

是皆孔ノ教ニ就テ異説ヲ起スモノナリ。斯ク其道多端ニ渉リ何レヲ本義トスルヲ知ル可ラサルヲ以テ孔学ノ本義原理ヲ知ル至テ難シ。要スルニ其教ノ本トスル所人ノ平常履行セサルヲ得サル道ヲ云フ。之ヲ例スルニ

誰能出不由戸、何莫由斯道。

Ⅲ：②－1

其人ノ拠ルヘキ道トハ即チ仁ニ外ナラス。其仁トハ四海万民皆一子ノ如ク観シ私欲ヲ以テ他ヲ害セス、天地ノ如ク清ク日月ノ如ク明ナル者ヲ云フ。

引証

孔子曰（論語）苟志於仁矣無悪也。

又曰（仝）君子無飲食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是。

又曰（同）志士仁人、無求生以害仁、有殺身以為仁。

又曰（仝）民之於仁［也］甚於人大。[46]

孔子ノ仁ヲ説クニ人ニ由テ其答ヲ異ニスルヲ以テ、今此ニ其意ヲ解明スル容易ナラスト雖、其一二ヲ挙テ之ヲ示スニ、

顔淵問仁曰、克己復礼為仁。

仲弓――曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲勿施於人、在邦無怨、在家無怨。

司馬牛問仁、曰仁者其言也訒。

樊遅問仁、曰愛人。又曰、居処恭、執事敬、与人忠。雖之夷狄不可棄也。

子張問仁、曰能行五者於天下為仁［矣］。

孔子自曰、剛毅木訥近仁。

如此其所説区々以孰義為真仁乎甚難。然要愛人之義アルヤ明也。然古人往々以仁字代用善字。之ヲ以テ考レハ、只他人ヲ愛スルノミナラス自分ノ善ヲ修メテ人ニ及ホス者ナラン。仁者衆善之称ト。此解尤モ仁ノ義ニ近シト云フヘシ。然レトモ其時ト場所トニ由テ他人ヲ愛スルコトノミニ用ルコトアリ。例ヘハ知仁又ハ知仁之勇[47]、仁義礼智等ノ如ク他字ト複用スルコトトキ也。論語中ニハ単ニ仁ノ字ヲ用ユルヲ以テ衆善の称と解して可なり。

孔子ノ道広しと雖、其的要ハ唯仁ノ一義ニアリ。例スルニ

参乎、吾道一以貫之。（論語）

曾子又謂其門人曰、夫子之道忠恕而已矣。（論語）

仁は衆善行ノ総称なるを以て、之を別用するときは種々の名起ル。之ヲ父子の間ニ用ルトキハ孝となり君臣の間ニ用ルトキハ忠となるなり。

夫仁ハ斯ク広大なるを以て常ニ側ニアルモノニシテ常ニ之ヲ行フコトヲ得る教なり。故ニ孔子ノ言ニモ

為仁由己、而由人乎哉。

仁遠乎哉、我欲仁斯仁至矣トアリ。

有能一日用其力於仁矣乎哉、我未見力不足者トアリ。此言を以て見るに、仁は行ヒ安シト雖、能ク之ヲ術間断なク行ふ者は少し。

孔子は門人を評サレシコト言アリ。

雍也　不知其仁。

子路　不知其仁。

求也　不知其仁。

赤也　不知其仁。

回也　其心三月不違仁、其余則明至焉而已［矣］。[50]

是ニ由て観れは仁を行ふ甚多難と雖知るべし。一時之を行ふは易しと雖、間断なく之を守るの難き也。孔子ノ主旨トスル処ハ日々時々間断なく仁を行ひ苦を離レ楽に就クニあり。故ニ漫ニ富貴を願ハすと雖、心に楽を之期す。此意遺書ニ就て考フへし。子貢―貧而無諂富而無驕如何。孔子――未如貧而楽富而好礼者。

孔子謂子路曰、女奚不曰、其為人也、発憤忘食、楽以忘憂、不知老之将至云爾。

孔子称揚顔回曰、賢哉回也、一箪食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、

回也不改其楽。賢哉回也。
孔子曰、知之者不如好之者、好之者不如楽之者。
又曰、知者楽水、仁者楽山。
又曰、食疏食飲水、曲肱而枕之、楽［亦］在其中矣。
以上挙タル処を以てすれは、孔子ノ道を設クル主意ハ人をして苦を脱して楽を得セシム主意ルニアリ。而シテ万事意の如クナラサル者ハ天命ニ帰シ、自身ノ力ニテ行フヘキモノハ楽ヲ生シ心ヲ安スルニアリ。
孔子嘗テ門人ニ命シテ各其志ヲ述ヘシム。其時孔子深ク曾点ノ対ヲ賞賛セラレタリ。其対ニ曰ク、暮春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而帰。[51]
又冉伯牛ノ疾を憂て言ハレタリ。
亡之命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。
孔子ノ派ハ専ら命を説キ墨子ハ非命を談す（墨子ノ非命篇）。墨子ノ意トスル処ハ孔子ノ説ニ反シ天下之治安ハ唯人ニアリ天命ニアラスト云フニアリ。然し孔子ノ云フ所ハ人力外ニアル者ヲ天命ニ帰スルナリ。墨子ハ人力ヲ入テ云フ。是レ孔墨の天命ニ就て異ナル所以なり。
孔子曰、噫、天喪予、天喪予。
之レ孔子顔回ノ死を嘆して云レタルモノナレトモ、以テ孔子ノ主トスル所天命ハ人力外ノモノニ帰スルニアルヲ知ルヘシ。
又曰、予所否者、天厭之、〳〵。
又曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言。
又曰、天生徳於吾、桓魋其如予何。
又曰、天之未喪斯文也、匡人如予何。
以上論する所ヲ以テ之ヲ観れは、孔子ノ天命を信シ且ツ之ヲ畏る、所以ヲ知るべし。孔子之ヲ畏る、故ニ之を祈る。
曰、丘之祈久矣。
曰、獲罪於天、無所祈也。
支那哲学中尤モ学者の喋々トシテ止マサルモノハ道也。道ニ三種の義アリ。
天道、人道、地道
其道タルヤ如何ナル者なるやを知る可らすと雖、支那学者の論する処ハ天地ノ法ニ従テ履行スルモノニシテ、人道ハ則チ天地ノ法ニ則るモノナリ。孔子ノ説クトコロハ亦之ニ外ナラサルナリ。之ヲ其書ニ考証スルニ、
中庸曰、天何言哉上律天時、下襲水土。（孔子ノ道ヲ評ス）
論語曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉。
是ヲ以て孔道ハ天時ニ則トルモノナルヲ信スルニ足ル。
是孔道ノミナラス支那古来唐虞三代ヨリ礼楽衣冠等都て日月星辰運行を象りて模造スルモノナリ。其他史上ニ存スル者ヲ以て之を考フルニ、支那人は天ヲ以て智識を有スル者と想像スルガ如シ。而シテ此運行ノ理を人ニ配シ、帝王を呼て天子と称シ、天下を治むるに天の覆フガ如ク地ノ載スル如クセヨ等トアルヲ以テ見ルヘシ。孔子ノ道ヲ立而運行須動ノ理ニ基カザルハナシ。之ヲ他人ノ説ヲ仮テ証スルニ、
論語曰、子絶四之々其註ニ
張子曰、四者有［一］焉、則与天地不［相］似。[52]
子張書諸紳、其註に
程子曰、却与天地同体。[53]

立之斯立、道之斯行。其註ニ程子曰、此聖人之神化、上下与天地同流者也。[54]

是レ支那哲学ノ一種異ナル所以ナリ。以上孔子ノ遺書ニ就て孔子道徳ノ大要を論スルナリ。

次に孔子教政治上ニ渉るものを論す。孔子ノ政事を談する、人ニ由て時ニ其対を異ニスルハ、仁ノ義解ノ問者ニ応シテ異ナルカ如シ。之を論語ニ考ルニ、

子貢問政。

子曰、足食、足兵、民信之矣。（富国強兵之意也）

子張問政。

子曰、居之無倦、行之以忠。

季康子問政。

子曰、政者正也、子帥以正、孰敢［不正］。

子路問政。

子曰、先之労之。

又曰、必乎正名乎。

仲弓

子曰、先有司、赦小過、挙賢才。

子夏

子曰、無欲速、無見小利。欲速則不達。見小利則大事不成。

景公

子曰、君々、臣々、父々、子々。

葉公

子曰、近者説、遠者来。

斯ク孔子ノ政ヲ説ク、問者ニ応シテ異シオナリト雖、要スルニ孔子ノ政治ノ本トスル所ハ修身道徳ニアリ。則チ仁ヲ以て政ノ本トセシコト明なり。之ヲ孟子ニ考ルニ猶瞭然タリ。孟子ノ説は仁義政治ハ仁義ニアルノミト云フニアリ。言ヲ換ヘテ言ヘハ、一身ヲ修ムルハ一国モ治マルトノ意ニシテ、当時未タ修身道徳政治両学ノ分レサルヲ知へし。故ニ孔子政ヲ論シテ曰、敬事而信、節用而愛人、使民以時。又曰、為政以徳。又曰、道之以徳、斉之以礼。又曰、能以礼讓為国乎、何有。又曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不従。又曰、苟正其身矣、於従政乎何有。不能正其身、如正之何。[55] 又曰（書経）［孝乎］惟孝友于兄弟、［克］施於有政。是亦為政、奚其為為政。又曰、知所以修身、則知所以治天下人。知所以治人、則知所以治天下国家矣。

又曰（大学ノ経）身修而后家斉、家斉而后国治、国治而后天下平。

以上挙クル所ニ就テ攷ルニ、孔子ハ修身ヲ以テ政治ノ本トセシコト疑ヲ入ルヘカラス（孔子修身ノ本ハ仁ニアリ）

Ⅳ：②－2

（老子ハ民ヲ愚ニシテ治メントス。孔子モ亦之ノ意ナキニアラス。其言ニ「可令由之、不可令知之」トアリ。是等ノ点ニ至テハ大ヒニ自由主義ニ相反スルモノト知ルヘシ）

孔学ノ風タルヤ、仁義ヲ尊ンテ利ヲ賤ムモノトス。之ヲ証スルニ孔子曰、放於利而行多欲。君子喩利於義、小人喩於利。賤貨而貴徳。不義而富［且］貴、於我如浮雲。子罕言利与命与仁。

孔学ハ之ヲ西洋ニ尋ヌルニ「インチュイシズム」［intuitionism：直観主義・直覚説か］ナリ。

朱子曰、循天地則不求利而自無不利。殉人欲則求利未得而害［已］

随之云々。[56]

孔子ノ書中ニ見ルトコロノ利ハ私欲ト公利相混スルモノヽ如シ。宋朝ノ学者ハ其公利ヲ取テ敢テ之ヲ棄テス—朱子論語ヲ註スルヲ見テ知ルヘシ。

程子曰、究経将以致用也。[57]

又曰、君子未嘗不欲利、但専以利為心則有害。唯仁義則不求利而未嘗不利也。[58]

此等ノ言ヲ以テスレハ、朱程子ハ全ク利ヲ捨テサルカ如シ。而シテ孔子ハ全ク利ヲ取ラサルカ如シ。然レトモ若シ宋儒ノ説ヲシテ信ナラシメハ孔子ノ謂トコロノ利欲ヲ云ナラン。孟子ト子思トノ問答アリ（孔叢子雑訓篇并ニ通鑑周記）。

孟子問牧民之道。子思曰、先利之。孟子曰、君子[之]所以教民者亦[有]仁義而已矣、何必[曰]利。子思曰子思曰、[59]仁義[者固]所以利之也。上下不仁、則不得其所。上不義、[則]不楽[為乱也]。於此為不利大矣。[60]是利ニ両義アルヨリ起ル。然ラハ孔子ノ利ナルモノハ小利私欲ヲ言フニ過サルヘシ。公利ヲ以テ論スレハ子思ノ言ノ如ク仁義モ亦タ利也。

老荘ハ自愛説（Egoism）説ニ帰シ孔子ハ他愛説（altruism）ニ属ス。

墨子其間ニ立テ兼愛ヲ唱ヘ、楊子ニ至テ自愛説愈盛ナリ。

孔子曰、汎愛衆而親仁。子貢問孔子、如有博施於民而能済衆何如、可謂仁乎。

孔子答テ曰、何事於仁、必也善乎。堯舜其猶病諸。又曰愛人。

孔学ハ政治ト修身トヲ混スルモノナリ。一人ヲ修ムルノ法立テハ天下国家ヲ治ムルコトヲ得ヘシトノ説ナリ。

孔学ト欧学トノ暗合スル所ヲ論ス。

泰西ノ学者、孔子ヲ以テ「ソクラテス」ニ比ス。其一生ノ行為并ニ教伝大ニ似タル所アルヲ以テナリ。

然レトモ細ニ之ヲ考レハ孔子ハ「ストイク」[Stoic：ストア派]ニ類スルアリ。（第一）言行ノ并ヒ行ハル、コト（第二）小利私欲ヲ戒ムルコト（第三）天地流行ニ則トリ従フコト（第四）己ニ克テ道ヲ崇フコト（第五）自分ノ身ヲ以テ道ヲ護シ生死ヲ共ニスルコトガ如キコト

且ツ「ストイック」ノ「エピキュラス」ニ於ル猶ホ孔子ノ楊子ニ於ルカ如シ。然レトモ孔子ト「ストイク」ト又大ニ異ナル所三点アリ。（第一）「ストイク」ハ「フィジカル」「理学」ヲ本トシ孔子ハ之ヲ用ヒス。（第二）孔子ハ楽ヲ本トシ「ストイク」ハ楽ヲ捨テヽ和ヲ求ム。[61]

（因云）元極雪大極大極動静　少極　三教一致（明林兆恩）—陶宗儀此説ヲ唱フト林子中ニアリ。林子ハ林兆恩ノ著書也。輟耕録ハ陶宗儀ノ著書也）[62]

老仏ノ教ハ一ニ帰スル者トスヘシ。老子ノ所謂無名ハ仏ノ如来性説ニ属ス。

（老）無名（列）疑独（荘）無々（孔）大極

公孫龍ハ「アブソリユート」ヲ論シタルカ如シ。其所謂離トハ此意ナリ。

欧人批評

欧人ノ支那学ヲ評スル誤謬少シトセス。[63]

Bridge 曰、支那古来大ニ影響ヲ有スルモノヲ孔学トス。

Wake 曰、孔学ノ支那ニ行ハル、ハ皮相ノミニテ実際然ルニアラス。

Maurice 曰、孔子ノ目途ハ主君タル者ヲシテ職分ヲ知ラシムルニア

リ。

「シュウェグリヒ」曰、東洋ノ哲学ハ「セオロジー」「ミソロジー」ニ止レリト。

Ueberweg 曰、孔子ノ理論ハ科学ニ合セス。

Jonson 曰、孔子ノ理論ハ科学ニ合ス。

以上　孔学終ル。

孔子死後諸弟四方ニ散シテ遺教ヲ弘ト雖、曾子最モ力アリトス。曾子独リ孔子ノ道ヲ得タルモノトス。

孔子ノ子ヲ伯魚ト云ヒ其子ヲ子思ト云フ。曾子ニ従テ道ヲ受ク。子思名汲、少時宋ニ適キ、楽朔ト語ル。説合ハサルヲ以テ子思楽朔ニ対シテ曰、汝ノ如キハ共ニ道ヲ語ルニ足ストス。楽朔大ニ怒リ兵ヲ出シテ子思ノ館ヲ囲ム。子思漸ク免ルコトヲ得タリ。是ヨリ子思大ニ憤起シテ世ニ道ヲ伝ヘンコトヲ望ミ、中庸ヲ作ル。中庸ハ古来伝ハル所ノ説ニ就テ作ル所ナリ。其源ハ堯命舜曰、允執其中。舜命禹曰、人心惟危、道心惟微。惟精惟一、允執其中。是レ中庸ノ起ル所以ナリ。

孔子曰、中庸之為徳也、［其］至矣乎。民鮮久矣。是ニ由テ之ヲ観レハ中庸ノ道タル堯ニ始マリ舜禹ニ伝ヘリ。孔子亦之ヲ述フ。子思ニ至リテ大成ス。

中庸ノ義タルヤ一方ニ偏セサルノ意ニシテ「アリストートル」ノ中庸（Means）ト異ナルコトナシ。程子中庸ヲ評シテ、初メニ一本ノ大意ヲ挙ケ中ニ之ヲ附引増長シ終リニ一理ヲ以テ之ヲ結フト云ヘリ。[64]

中庸ノ道ノ本源ハ天ヨリ出ルモノトス。故ニ其巻首曰、天之命謂之性、従性［之］謂之道トアリ（是一本之眼目也）。第壱章（a）天之命謂之性、率性［之］謂之道、修道［之］謂之道教（説道出于天）（b）道也者不可離須臾離也。可離非道也（説道不可離）（c）君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞（説存養省察之要）（d）致中和、天地位焉、万物育［焉］（説聖神功化之極）

中庸一篇之意ハ唯此一章ノ意ヲ述ヘタルモノナリ。

子思ノ学孟子ニ伝ル。

孔子―曾子―子思―孟子

孟子◯孟子、名軻、字子車或子輿。魯ノ鄒邑ノ人ナリ。其先祖ハ魯ノ公孫、孟孫子ノ後ナリト云フ。

孟孫子生死之月日未詳。孟子ノ譜ニ依ルニ周ノ定王三十七年ニ生レ赧王廿六年ニ死ス。年八十四。都穆、田藝衡等ハ此説ヲ信ス。然レトモ其説信拠シ難シ。其故ハ、年契ニヨリテ尋ルニ定王ハ二十八年ニテ死ス。且此年ヨリ赧王廿六年迄ハ百三十五年ナリ。是陳士乞［陳士元］ノ説ナリ。

朱子曰、自孔子卒至孟子遊梁時、方百四十余年、而孟子已老。［然］則孟子之生、去孔子未百年也。[65] 是ニ由レハ孟子ハ周安王二年ニ生レタルモノトスヘシ。孟子説解曰、疑孟子或生［於］安王初年、卒于赧王初年。[66]

孟子履歴◯孟母初置孟子於墓側。次ニ遷テ市場ニ行ク。三ビ転シテ校辺ニ居ス。之ヲ三遷ト云フ。孟子嘗テ豚ヲ屠ルヲ見テ母ニ問フ。母告クルニ汝ニ食マシムルナリト云フヲ以テス。而母之ヲ欺ンコトヲ懼レ故ラニ買テ之ヲ食ハシム。

孟母嘗テ機ヲ中断シテ孟子ヲ戒ムルコトアリ。之ヲ孟母断機ト曰フ。

孟子学ヲ孟母子思ニ受クルト云フ説ト其門人ニ受シトノ説アリ。然ルニ子思ヨリ受ケシトヤ㐅ミヘタリ。孟子子思ニ見ユ。子思大ヒニ

喜フ。或ハ孟子ノ紹介ナクシテ面接シテ喜フコトヲ疑問ス。子思之ヲ喩ヲ取テ諭セシコトアリ。

孟子始メテ斉ノ宣王ニ説キ、次ニ梁ノ恵王ニ説クト雖、迂闊ナリトシテ用ヒラレス。当時ノ天下合従連衡ヲ務メ功利ヲ競フノ時ニシテ仁義ノ道行ハレス。故ニ孟子退テ孟子七篇ヲ作ル。

孟子曰、聖王不作、諸侯放恣、処士横議、楊朱墨翟之言盈天下。天下之言、不帰楊則帰墨。当時楊墨之道天下ニ行ハル。孟子之ヲ排シ孔子ノ道ヲ弘ム。韓退之、之ヲ称賛シテ其功禹ノ下ニアラストナス。後之ヲ亜聖公ト称ス。

孟子書○今伝ハルモノハ七篇ナリ。其作者未詳。

司馬遷ハ孟子自ラ編スルモノト云フ。又門人ノ作ト云モアリ。

林謹思（ママ）［林慎思］、韓退之、薛徳温［薛瑄］、晁以道［晁説之］、此四人ハ孟子ノ門人ノ作ル所ト云フ説ナリ。

司馬遷、趙岐、郝中輿（ママ）［郝仲輿（郝敬）］

此三人ハ孟子自作ノ説ナリ。又孟子ノ作タルモノヲ門人ガ潤色校正シタリト云一説アリ。

旧ト孟子ニハ七篇ノ外ニ四篇アリ。都合十一篇ナリ。性善弁篇。文説篇。孝経篇。為政篇。此四篇ハ外篇ト云ヒ本篇七篇ヲ内篇ト言ヘリ。

孟子学○其学ハ孔子ヲ祖述スルモノニシテ荀子楊子ト同シ。

孟子頌揚孔子曰、自生民以来未有孔子也。曰、自生民以来未有夫子也。又曰、自生民以来未有盛於孔子者也。

是ヲ以テ孟子孔子ヲ尊崇セシコト知ヘシ。

孔門諸弟各孔子ヲ祖述スト雖、各其一端ニ偏シテ諸説随従テ分ル。

孟子ノ時ニ至テ益相離ル。当時蘇秦張儀ノ学大ヒニ天下ニ行ハレ孔学大ニ衰微シタルヲ見テ孟子大ニ慨嘆シ、子思ノ門ニ就テ其本旨ヲ奉シ正道ヲ開カントセリ。子思ハ曾子ヨリ伝ハリ、曾子ハ孔子ノ直弟子ニシテ其道ノ正義ヲ受ケタルモノトス。故ニ孟子ノ伝ル所尤モ孔子ノ道ニ適切ナルモノナリト称ス。然レトモ其説ク所多少孔子ト異ナルアリテ、且ツ其力ノ孔子ニ及ハサルハ後学ノ説ヲ見テ知ルヘシ。

程子曰、未敢便道他是聖人、然学已到至処。[67]

孔子言フ所ハ判然トシテ外ニ其意ヲ示サス。孟子ハ言ニ過キ其意ヲ外ニ示ス故ニ人ノ評難ヲ受ルニ到ル。之レ孔ヨリ劣ル所以ナリ。然レトモ孟子ハ其時勢ノ大ニ孔子ノ時ト異ナルヲ以テ権謀ヲ用サルヲ得サルノ事情アリ。且ツ孟子ハ孔子ノ説ニ異ナル所アリ。（1）程子曰、中尼（ママ）只説一個仁字、孟子開口便説仁義。[68] 然レトモ仁義固ヨリ孟子ニ始メテ始マルニアラス。其前已ニ此語アリ。易説卦云、立人之道曰仁［与］義。兼三才而両之。

中庸云、仁者人也、親々為大。義者宜也、尊賢為大。

老子云、大道廃有仁義。

其他仁義ノ文字、墨子ニ列子ニ関尹子ニ鶡冠子ニ出ツ。然レトモ他書ニハ往々仁義ノ二字ヲ見ルノミニテ、孟子ニ至テ始メテ其別ヲ詳ニス。故ニ仁義ノ二字ハ孟子ヨリ始マルト云モ不可ナラス。

（2）程子曰、仲尼只説一箇志、孟子便説許多養気出来。[69]

（3）又曰、孟子亦説一箇良心来。良心ノ事孟子ニ始マル。然レトモ古書ニハ道心ト云フコトアリ。其義良心ト近シ（道心之字見于古書—尚書及ヒ荀子）

（4）程子曰、孟子有大功於世、以其善言性善也。性善［養気］之論、［皆］前聖所未発。

然レトモ古書中全クナキニアラス。詩大雅蒸民云、天生蒸（ママ）民云々。

易繫辞云、一陰一陽云々。魯論云、性相近［也］、習相遠也。
又云、人之生也直、罔之生也幸［而］免。
又云、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。
又云、道不遠人。
中庸云、命天命［之］謂之性（ママ）、率性［之］謂之命（ママ）道。
物徂徠ハ性善ノ説ハ老荘ノ中ニ始マルト云フト雖、[70] 判然タル其字ダモ其書ニ見エス。甚タ疑フヘシ。性ヲ云フハ孔孟ニ始マルトスヘシ。孟子ヲ貴ヒタルハ宋儒ヨリ始マル。古ハ大ニ之ヲ貶セシモノナリ（桂啓虎芳ハ性ハ老荘ヨリ始マルノ説アリ）

次ニ孔孟ノ別

（1）孔言少ク孟弁過ク。（2）孔ハ意ヲ外ニ顕サス孟ハ意ヲ外ニ示ス。（3）孔ハ仁ノミ孟ハ仁義。（4）孔ハ志孟ハ許多養気。（5）孟ハ良心。（6）孟ハ性論。

孟子ノ説クトコロ孔子ノ言ハサルトコロヲ交ユト雖、要スルニ孔学ノ範囲ヲ脱スル能ハス。其説ク所皆孔子ヲ祖述シ其意ヲ開張スルニアリ。

孟子ノ説ク所ノ仁義ナル者礼智ナルモノ皆孔子ノ仁ノ字ヲ活用シ来ルノミ。其書ニハ単ニ仁ト云フナリ。重テ仁義ト云ヒ仁義礼智ト云フアリ。

（1）仁（2）叢仁義（3）仁義礼智

此仁ナル者全ク利ト相反スルモノトス。然レトモ此利ナルモノハ私欲小利ヲ云フノミ。

孟子ノ孔子ヲ祖トスル其記ヲ引クニ、

孟子曰（a）乃所願則［学］孔子［也］（b）自有生民以来未有孔子也（c）孔子之謂集大成

孟子ハ孔子ヨリ世ノ後レタルヲ以テ、其説ク所稍異ナル所アルニ至ルモ勢ノ止ム能ハサルナリ。

范氏曰、蓋孔子之言、為邦之正道。

孟子之言、救時之急務、所以不同。[71] 且ツ孔子ハ言少フシテ孟子ハ弁ヲ好ム。故其書論理ノ正シカラサルトコロ一ナラス。弁ニ過テ却テ瑕ヲ求ムルモノナリ。

孟子ノ仁義ナルモノ如何ヲ知ラトントスルニ、

孟子曰、［夫］仁、天之尊爵也、人之安宅也。

仁、人之安宅也。義、人之正路也。仁、人心也。義、人路也。仁也者、人也。合而言之、道也。又引孔子之言曰、道二、仁与不仁而已矣。

是ニ由テ見レハ孟子ノ道ハ仁義ニアルコト知ルヘシ。猶ホ孔子ノ仁ヲ以テ道トナスカ如シ。孟子仁義ヲ以テ道トナスハ、仁義ハ人ノ本心ナリ、仁義ノ外ハ本心ニアラサルナリ。故ニ曰ク、人皆忍ヒサルノ心アリ。人ノ井ニ入ラントスルヲ見レハ惻隠ノ心ヲ生ス。其心タルヤ乃チ仁ナリ。之レ人ノ本心ニ性来仁ノ端アル所以ナリ。又人ニ羞悪ノ心アリ辞譲ノ心アリ是非ノ心アリ。是則仁義礼智ノ一端ナリ。此四端ナルキモノハ人ニアラサルナリ。

何故ニ孟子ハ人ヲシテ此仁義ニ従ハサルヲ得サルモノトナセシカヲ考フルニ、孟子ハ之ヲ以テ善トスレハナリ。

孟子曰、人性之善也、猶水之就下也。人無［有］不善、水無有不下。

斯ク孟子ハ人ノ性ヲ以テ善トシ堯舜ハ則其性ニ従フモノトシ桀紂ハ其天然ナノ性ニ悖ルモノトス。人ノ悪ナルハ私欲ノ為メニ制セラルヽモノニシテ本然ノ性ヲ失フヨリ外ナラス。人生ルヽヤ良心ヲ有スト雖、私欲ノ為メニ常ニ其性ヲ害フモノニシテ其実性悪ナルニアラス。

孟子ハ人ノ性ニ従フヲ以テ天ニ従フモノトス。其天ナルモノハ心意ヲ有スル神ノ如キモノニ考フル如シ。故ニ天意ニ従フヲ以テ道トス。斯ク天意ニ従フヨリ、浩然ノ気ヲ養フト云フコトヲ説クナリ。猶孔子ノ天ヲ楽ムト一般ナリ。

其為気也至大至剛、以直養而無害、則充塞于天地之間。又為其気也配義与道。無是餒也。

此浩然ノ気タルヤ孔子ノ未タ説カサルトコロニシテ孟子始メテ言フ。道徳ノ道是ニ至テ始メテ備ハル。凡ソ人タルモノ生レテ天然ノ気[72]ニ従ヒ仁義ヲ守リ人道ヲ尽ストキハ自カラ足ルトコロアリテ、浩然ノ気タルヤ天地自然ノ気ニシテ、人ニシテ道ヲ守ルトキハ天地化育ノ気ノ如ク宇宙間ニ満テ至ラサル所ナキ横[73]大ノ気ヲ云フナリ。

○孟子政治論○

孟子ノ政治ヲ説クヤ孔子ニ同ク仁義ヲ以テ本トス。

孟子説梁恵王曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣。

又曰、苟為後義而先利、不奪不厭。

又曰、未有仁而遺其親者也、未有義而後其君者也。

此等ニヨリテ観レハ、孟子ハ仁義ヲ本トシテ政道ヲ説キ伍専ラ利欲ヲ戒ムルモノト知ルヘシ。

又曰、仁者無敵。

又曰、君子［有］不戦、々必勝矣。

又曰、国君好仁、天下無敵矣。[ママ]

人ヲ仁ヲ修ムレハ天下敵スルモノナク戦ハスシテ勝ヲ制スルコトヲ得ルナリ。

斯ク孟子ハ仁義ヲ以テ政本トスルヲ以テ、道徳ト政治相混シタルハ孔子ニ同シ。

孟子ハ多少人民ノ権理ヲ説キ大ニ之ヲ重スル風アリ。之ヲ証セントスルニ先ツ支那ニテ孟子以前ノニ民権ノ説アルモノヲ引カン。

書五子之歌—民惟邦本、本固邦寧。

関尹子三極篇—聖人不以一己治天下、而以天下治天下。

亢倉子君道篇—夫国以人為本、人安則国安。[ママ]

孟子曰、左右皆曰覧、未可也。諸大夫皆曰覧、未可也。国人皆曰覧、然後察之。[ママ]

又曰、天子不能以天下与人。

又曰、民為貴、社稷次之、君為軽。

孟子又引書太誓曰、天視自吾我［民］視、天聴自我民聴。

孟子以前ニ孟子民権ノ説ナキニ非スト雖、孟子ニ至テ始メテ民ノ国本ニシテ君ヨリ重キコトヲ説キタルコト明ナリ。此点ニ於テハ孔子ト稍異ナル所ナリ。

孔子曰、非天子、不議礼、不制度、不考文。

又曰、民可使由之、不可使知之。

要スルニ孟子ノ政道ハ孔子ト同ク仁義道徳ヲ本トス。而シテ其異ナルハ孟子ハ君ヲ軽トシ民ヲ重トスルニアリ。

批評

孟子ヲ評スル小ニハ孔子ト同理ヲ以テスヘシ。唯別ニ一評ヲ加ヘント欲スルハ、孟子ノ仁義ノ心天然人ニ備ハルト云フ点ニアリ。人ノ井ニ入ラントスルヲ見レハ之ヲ救ハントスル心アリテ出ヲツ。是レ人ニ天然ノ性、仁義ヲ有スルヲ以テナリト云フ。西洋ノ説ニ従フニ、人ノ井ニ落チントスルニハ自身ノ方ニ苦ヲ感シ其苦ヲ去ラントスルニハ其人ヲ助ケサルヲ得ス、唯一ニ之ヲ天性ト云フヲ得ス。孟子ノ所謂良心即惻隠ノ心アルト云フハ「コンシンス」［Conscience］ノ

事ナリ。

先ツ性ノ善悪ヲ説カントスルニハ第一ニ性トハ如何ナルモノヲ云ヒ善トハ如何ナル事ヲ云フカヲ定メサルヘカラス。而シテ后其善悪ヲ説クヘシ。孟子ノ性トハ（Human Nature）ノ事ナルヘシ。之ヲ一才ニ善ト云ヒ更ニ其定義ヲ先定セサルハ其論極テ疎ナリト云フヘシ。

孟子ノ性ハ宋儒ノ性トハ異ナル所アルヲ覚ユ。

○荀子

荀子、名ハ況。後世尊称シテ荀卿ト云フ。趙ノ人ナリ。又ハ孫卿ト云フ。漢ノ宣帝ノ諱荀ト云フヲ以テナリ。少時斉ニ遊フ。讒ヲ得テ遁レテ楚ニ至リ春申君ニ登用セラレ楚蘭陵令トナル。春申君死シテ後荀子此ニ家ス。李斯、韓非子皆其門人ナリ。荀子ノ意タルヤ孔子ノ道ヲ明ニセントスルニアリ。故ニ孟子ト共ニ孔子ノ道ヲ伝ル者ナレトモ稍其見ルトコロヲ異ニスルヲ以テ荀子ハ孟子ヲ容レス。又荘子ヲ譖ル。

荀子一家ノ説タルヤ性悪礼偽ノ一事ナリ。故ニ后人荀子ヲ悪ムモノ多シ。然レトモ其意孔子ヲ祖述スルニアルヤ明ナリ。

方孝儒（ママ）［方孝孺］曰、妄為蔓衍不経之詞（ママ）、以蛆蠹孟子之道、其区々之［私］心不過欲求異于人（ママ）、而不自知卒為斯道讒賊也。[74] 之レ荀子ヲ悪セシ言ナリ。日本物徂徠荀子ヲ弁護セリ。徂徠曰、今不読其書而輙言之、耳食者又従而和之、豈不悲哉。[75]

其実荀子ハ漫リニ譖ルヘキモノニアラサルナリ。

荀子三十二篇、巻数二十アリ。

勧学篇、天論篇、性悪論、

此三篇ハ全部中尤モ読ムヘキモノナリ。

文章ヲ以テ論スレハ冗長渋晦ニシテ明瞭ナラズ。当時孔子ノ畤道大ニ衰ヘテ世間ニ行ハレス。荀子之ヲ憂ヒ其教ヲ再興セント欲ス。

孟子ト異ナル所ハ性悪ト礼儀（ママ）トノ二点ニアリ。

○荀子学源

天論篇ニ就テ考ルニ天自ラ常ニ行フノ道ナリ。其道タルヤ堯ノ時ニ存シテ桀ノ時ニ亡フルニアラス。常ニ存シ常ニ行ハル丶モノナリ。人トシテ此道ニ従ヘハ聖人トナリテ興リ之ニ反スレハ悪トナリ亡フ。堯ノ興リ桀ノ亡フル唯此道ニ従フト従ハサルトニアルノミ。君子小人ノ別モ亦唯此ニ由ル。是即チ天地自然ノ法ニシテ「子セシテー」［Necessity］ノ義ニ稍合スルカ如シ。

人性ノ悪善亦此道ニヨリテ分ル丶モノトス。性悪篇ニヨリテ見ルニ人生ル丶トキ利ヲ始好ムノ欲アリ又人ヲ悪ムノ性アリ声色ノ欲アリ。其性ニ従ヘハ争奪乱賊淫濫ノ風起リ仁義忠信地ヲ掃フニ至ルヘシ。其悪性ヲ転シテ善トナサント欲セハ良師ニ就キ善教ヲ待タサルヘカラス。故ニ荀子ノ説タルヤ悪ハ人ノ本来ノ性ナリ善ハ偽造ノ果ナリ。是レ孟子ト荀子ト異ナル所ナリ。人ノ性タルヤ学テ得ヘキモノニアラス。天然ノ性也。其学ヲ得ヘキハ礼ナリ。人ノ善トナルハ本性ヲ矯正シ得ルナリ。荀子曰、人ノ性タルヤ饑レハ食ヲ欲シ労シテ休ヲ欲ス。故ニ其時ニ臨ンテ父兄ニ辞譲セサルハ本性ナレトモ其父兄ニ辞譲スルハ本性ニアラス。其辞譲ナル者ハ強学思慮シテ初メテ得ルモノナリ。

又孟子ヲ駁シテ曰ク、若シ人ノ本性善良ナレハ聖人用ユル所ナシ。其性ニ従テ可ナリ。然ルニ聖人ナルモノアリテ刑法ヲ立テ政度ヲ起ス所以ハ人ノ性悪ナレハナリト云フ。以上三点ヲ概スルニ孟子ハ人ノ性ハ善ナレトモ他ヨリ其性ヲ晦マレテ悪ニ赴カシム。荀子ハ悪ハ

本性ニシテ善ハ偽性ナリトス。荀子ハ天ニ常行ノ道アリ之ニ順スレハ吉トナリ善トナリ之ニ逆ヘハ凶トナリ悪トナリ、之ニ順フハ天性ヲ矯正シテ後得ヘキナリ。何ニ由テ矯正スヘキヤ。礼儀ニヨルナリ。之ニ由テ天性ヲ矯正シテ常行ノ道ニ順応スルヲ得ルナリ。之レ荀子全篇ノ主意ナリ。此理ヲ推シテ勧学ノ道ヲ立ツ。人ノ本性ハ悪ニシテ之ヲ善クスルニハ学問教育ノ道ヲ用ヰサルヘカラス。

荀子曰、木受繩則直、金就礪則利。

又曰、君子［生］非異也、善仮於物也。

君子トナリ聖人トナルモ本性ヲ矯ムルニアリ。之ヲ矯ムルニハ礼儀ヲ以テセサルヘカラス。

荀子曰、其文則始乎誦経、終於読礼。其義則始乎為士、終乎為聖人。

又曰、礼者法之大分、群類之綱紀也。故学至乎礼而止矣。

孟子ハ詩ヲ好ム、荀子ハ礼ヲ好ム、楊子ハ易ヲ好ムト司馬光ノ云ヘルアリ。[76]

要スルニ荀子ノ学タル礼ヲ知ルニアリ。荀子ノ修身ニ於ルヤ亦礼ヲ以テ行ヲ正スニアリ。

荀子曰、由礼則治通、不由礼則勃乱提慢。

又曰、礼者所以正身也、師［者］所以正礼也。

是レ其本ツク所孔子ノ学ニアリ。

此礼義ヲ以テ身ヲ正スノ一点ニ至リテハ孟子モ荀子ニ異ナルコトナシ。孟子ハ辞譲ノ心ハ礼ノ端ナリト云フ。唯異ナルハ孟子ハ礼ハ本来ノ性ニシテ学ハ之ヲ養成スルニ過キストナス。

荀子ノ政治ヲ論スルモ唯一身上ノ事ヲ公衆ニ施コスト云フニ過ス。其帰スル所礼法ヲ以テ人民ヲ治メントスルニアリ。

荀子曰、礼義者治之始也。

又曰、修礼者主。[77]

又曰、人生不能無群、群而無分則争、々則乱、々則離、々則弱、々則不能勝物。故宮室不可得而居也、不可少項舎礼義故之謂也。

荀子ノ所謂礼ナルモノハ其意義濶大ニシテ秩序ノ意ナリ。西洋ノ「モラルオルダル」ト云ガ如シ。人ノ生ルヽヤ欲アリテ生ス。之ヲ其欲スルトコロニ従ヘハ人ハ争ハサルヲ得ス。之ヲ治メント欲セハ其分ヲ定テ礼ヲ設ケサルヘカラス。故ニ聖人先ツ礼ヲ定メテ人ヲシテ常行ノ道ニ従ハシムルニアリ。礼ハ則チ常行ノ道ニ従ハシムル器械ナリ。

◯楊子

楊子、名雄、字ハ子雲。蜀郡成都ノ人ナリ。幼ニシテ学ヲ好ミ博覚見サルトコロナシ。口吃ニシテ劇談スル能ハス。清静無為ニシテ嗜欲少ナク巧名ヲ求メス而聖哲ノ書ニアラサレハ好マス。辞賦司馬相如ニ擬ス。屈原カ世ニ容レラレサルヲ悲ミ自カラ以為ラク、遇不遇ハ天也何ソ身ヲ沈ムルコトヲセント。乃チ反離騒ヲ作ル。年四十余蜀ヨリ京ニ遊フ。王音奇ノ門下吏トナリ衍士後ニ郎ニ除セラレ王莽董賢ト官ヲ同フス。莽位ヲ奪フニ及ンテ揚雄復侯タラス。転シテ大夫トナル。但古ヲ好ミテ道ヲ楽ミ名ヲ後世ニ伝ヘント欲ス為為ル[78]経ハ易ヨリ大ナルハナシト乃チ大玄ヲ作ル。伝ハ論語ヨリ大ナルハナシト乃チ法言ヲ作ル。史篇ハ倉頡ヨリ善キハナシト乃チ州箴ヲ作ル。[79]賦ハ離騒ヨリ深キハナシト及ヲ乃チ反離騒ヲ作ル。辞ハ相如ヨリ麗ハシキハナシト乃チ四賦ヲ作ル。而シテ心ヲ内ニ用ヒテ外ニ求メス。

王莽ノ時雄書ヲ天禄閣上ニ校ス。罷ヲ恐レ閣上ヨリ投下シ幾ント死ス。莽之ヲ赦シテ大夫トナス。天鳳五年ニ卒ス。享年七十一（侯芭

ハ其門弟ナリ）。雄没シテ今ニ至ル迄千八百余年、其法言大ニ行レテ大玄ハ終ニ顕レス。

楊子法言凡十巻。学行吾子修身ヨリ君子孝至ニ至ルマテ凡十三篇アリ。其文全ク論語ニ倣ヒ問答ノ法ヲ用ユ。

宋咸曰、彼法言、準夫論語。文高而絶、義秘而淵[80]。

司馬光曰、孟子之文直而顕、荀子之文富而麗、楊子之文簡而奥[81]。

薛敬軒曰、揚子法言、意［実］浅而飾以短渋奇古之詞、何耶[82]。蓋シ楊子ハ学問文章共ニ孟荀ニ及ハサルナリ。

楊子ノ学ハ全ク孔子ニ本キ孔子ノ道ヲ敷衍スルニ外ナラス。故ニ吾子篇曰、好書而不要諸仲尼、書肆也。好説而不見諸仲尼、説鈴也。

又曰、仲尼之道、猶四瀆也。経営中国、終入大海。

又自ラ謂ルコトアリ。道ニ入ルニハ孔子ハ戸ナリ。故ニ楊子ノ修身ヲ説クモ政治ヲ説クモ皆孔子ノ意ニ外ナラス。但シ其創称セシトコロハ、修身篇云、人之性也善悪混、修其善則為善人、修其悪則為悪人。蓋シ楊子ハ孟荀皆一偏ニ局スルヲ知リ、之ヲ折衷シテ性ハ善悪相混ト云ヘリ。

司馬光曰、如孟子之言、所謂長善者也。如荀子之言、所謂志悪[83]者也。揚子則兼之矣[84]。

楊子ノ学ノ根本ハ「人之性也善悪相混」ノ八字ニアリ。故ニ啻ニ此ヲ以テ修身ノ本トスルノミナラス、其学ヲ論スルニ、学行篇云、学者、所以修性也。視聴言貌思、性所有也。学則正、否則邪。人ノ性ハ本ト善悪兼有スルモノナルユヘ、唯学ヘハ善ナレトモ学ハサレトモ悪トナルノ意アリ。

又其政治ヲ論スルモ、先知篇云、政之本身也。

是レ修身ハ政ヲナスノ法ナリトノ意ナレトモ修身ノ本ハ其性ノ善ヲ修ムルニアルガ故ニ楊子ノ学ノ根本ハ人之性也善悪混ノ七字ニ外ナラズ。是レ揚子ノ創称スルトコロナリ。

修身太篇云、修身以為之矢焉[85]思以為矢、立義以為明[86]、［奠］而後発、々必中矣（巧ニ修身正思ノ法ヲ述ヘタルナリ）

問神篇云、人心其神矣乎[87]。操則存、捨則亡。能常操而而存者、其惟聖人乎。（荘子ノ存心説ト同シク甚タ玄妙ノ意アリ）

五百篇云、荘揚蕩而不法、墨晏倹而廃礼、申韓険而無化、鄒衍迂而不信。（講師ノ説ニハ荀揚語而不精ノ一句ヲ加ヘントスト云フ）

大玄経ニ玄ハ莫妙[87]測ルヘカラスカサルハ絶対（アブソルート）ヲ指スニ似タリ。

対離篇ニ云ク、玄［者］幽攡万類而不見形者也。玄卓然示人遠矣、曠然廓人大矣、淵然引人深矣、渺然絶人眇矣。

近玄者、玄亦近之。遠玄者、玄亦遠之。譬若天蒼々然在於東［面］西［面］南［面］北［面］[88]、仰而無不在焉、及其俛則不見也。

玄枚篇云、玄有一篇道、一以立起[89]、一以之生[90]（玄ハ万物ノ原始ノ義アリ）

玄者神之魁也。天以不見為玄、地以不形為玄、人以心腹為玄。

玄鴻綸天玄[91]、婁而拑［之］於将来者乎。大天方、易無時、然後為鬼神也。

果シテ然ラハ楊子モ亦人類ノ外一種知ルヘカラサルモノアルヲ信セシ人ナリト謂ハサルヲ得ス。

註

1 井上哲次郎『井上哲次郎自伝』冨山房、一九七三年、九頁。

2 大島晃「井上哲次郎の「東洋哲学史」研究」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』第四五巻第三号、一九九六年、三三六頁。

3 島薗進（監修）・島薗進・磯前順一（編纂）『井上哲次郎集　第九巻　論文集、解説』クレス出版、二〇〇三年、一七頁。なお井上哲次郎の他の講義の翻刻としては、明治二六（一八九三）年から翌年に行われた「比較宗教及東洋哲学」の翻刻がある（磯前順一・高橋原「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義――解説と翻刻――」『東京大学史紀要』第二一号、二〇〇三年）。

4 佐藤将之「井上円了思想における中国哲学の位置」『井上円了センター年報』二一号、二〇一二年、三一－三二及び五三頁。

5 町泉寿郎「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」『日本漢文学研究』第一一号、二〇一六年。

6 二〇一八年度中に『井上円了センター年報』上で翻刻される予定である。

7 前傾注（1）七四頁。

8 前掲注（4）五三頁。

9 一二葉表。

10 四九葉表。

11 東京大学法理文三学部編『東京大学法理文三学部一覧　従明治一五年至明治一六年』丸家善七、一八八二年、二二一－二二五頁。

12 東京大学三学部編『東京大学法理文三学部一覧　従明治一六年至明治一七年』丸家善七、一八八四年、二三七頁。

13 池上哲司（監修・解題）・竹花洋佑・西尾浩二・朴一功（翻刻・翻訳・校閲）『フェノロサ「哲学史」講義』二〇一三年。村山保史（監修・解題）・竹花洋佑・西尾浩二・朴一功・Michael Conway（翻刻・翻訳・校閲）『フェノロサ「哲学史」講義』二〇一六年。いずれも日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「日本における西洋哲学の初期受容――フェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳――」（研究代表者：村山保史、研究機関：大谷大学、領域番号：25370096）の成果である。

14 ②を通じて見開きページの左右両端が切り取られており、見開き時に常に③表紙の「明治十九年二月十二日」の文字が右側に見えるようになっている。

15 ③から⑤までは、島田重礼の明治一九（一八八六）年から翌年に掛けての講義の記録と思われる（前掲注（5）一一頁）。

16 一四葉表。

17 前掲注（11）一一三頁、二〇九頁。また前掲注（12）一二〇頁、二一六頁。明治一五－一六年度については「東京大学第三年報」においても確認できる（『東京大学年報　第二巻』東京大学出版社、一九九三年、二二四頁）。

18 前掲注（1）七四頁。

19 前掲注（5）一四一頁、井上哲次郎『支那哲学史　巻一』二松学舎大学附属図書館蔵、四葉表－裏。

20 例えば、荘子とクセノパネス、列子とヘラクレイトス等（前掲注（19）井上哲次郎、七葉裏）。

21 現在では「揚雄」「揚子」と表記されることが多いが、本資料では「楊」も多く混在している。なお揚雄の伝記的記述は『漢書』「揚雄伝」に基づいている。

22 海津子享『誥道大素』は文化六（一八〇九）年発行の医学書（蒲

原宏「海津子享　誥道大素」『新潟県医師会報』第三二一号、一九七六年、表紙裏）。

23「昭公十二年」の誤りか。

24カタカナ「シ」＋合略仮名「シテ」。

25「自」を「日」としている。

26『白氏文集』巻六五「読老子」

27原資料では、冠に「林」、その下に「兆」を付けて、合わせて一字であるかのように記している。

28「力命篇」を「ガ命篇」としている。

29この部分だけを取り出せば、評価の順番として「第三期→第二期→第四期」としているようにも読めるが、第三期は「哲学ノ漸ク衰ヘタル」とされていることから考えにくい。また「第二期→第三期→第四期」としても、やはり「哲学大ニ復興ス」とされている第四期の評価が低いように感じられ、不自然である。

30円了本は「拠」とする（一葉裏）。

31円了本は「皈」（「帰」の異体字）とする（二葉裏）。

32円了本は「左ノ二書」とする（三葉裏）。このことから「左ノ書」とは『異端弁正』と『老子弁』を指すことが分かる。

33清・張海鵬『学清討原』を指す。

34草書体では「経」の旁は「聖」と類似している。

35円了本は「右四書」とする（四葉裏）。「誥道大素」から「黄帝宅経」までを指すと思われる。

36「呉才老」（＝呉棫）で切るべきところを、「老」と「朱」の間に句点が入れられている。

37「易ト春秋ハ」より「真作トナスコトアリ。」までは、円了本では欄外に記される（四葉裏－五葉表）。

38原資料は「随」の「有」を、「左」と「日」を上下に組み合わせた字に作る。

39佐藤一斎『論語欄外書』に「『論語』の書、誰の編次する所なるかを知らず。班孟堅云ふ、門人相与に輯す、と。鄭康成云ふ、仲弓・子游・子夏の撰定なり、と。柳子厚云ふ、楽正子春・子思の徒に成る、と。」とある（吹野安『佐藤一斎全集　第六巻』明徳出版社、一九九四年、三一頁）。

40円了本には「[……]騂駁ナリト。此書ハ王粛ノ偽作ナリト伝フ。本朝ニテハ太宰純之ヲ信用セント雖モ」（傍線引用者）とあり（六葉裏）、本資料では傍線部が欠落している。欠落部分は円了本の丁度一行分に相当する。

41円了本は「閲」とする（六葉裏）。

42陶宗儀『輟耕録』巻五。

43薛瑄『読書録』巻一。

44円了本は「徴」とする（八葉裏）。

45円了本は「至ル」と「周子」の間に「王陽明ノ学派アリ程子ノ学派アルカ如シ」が入る（九葉裏）。

46「水火」を「人大」としている。

47円了本は「知仁勇」とする（一二葉表）。

48円了本は「皈」とする（一二葉表）。

49「日月」を「明」としている。

50円了本は直後に「自評○若聖与仁則吾豈敢」が入る（一三葉裏）。

51円了本には「詠而帰」の後に「孔子ノ此言ヲ嘆賞セラレタルヲ以テ見レハ其意心ヲ放チ楽ヲ専ラニスルヲ以テ自身ノ教本トナスニ

アリ決シテ唯世ヲ捨テ俗ヲ離ルヽノ意ニ非ズ要スルニ唯々楽ノ一事ニアリ而シテ其意ノ如クナラザルモノハ都テ之ヲ天命ニ帰スルナリ」とあり「孔子冉伯牛ノ」と続く（一五葉表－裏）。

52 張載『正蒙』「中正」。『近思録』「為学」に引用あり。

53 朱熹『論語集注』「衛霊公」

54 朱熹『論語集注』「子張」

55 「人」を「之」としている。

56 朱熹『孟子集注』「梁恵王章句上」

57 朱熹『論語集注』「子路」

58 朱熹『孟子集注』「梁恵王章句上」

59 改ページの前後で「子思曰」が繰り返されている。

60 「中載孟軻問、牧民之道何先。子思曰、先利之。軻曰、君子之告民者、亦仁義而已。何必曰利。子思子曰、仁義者、固所以利之也。上不仁則不得其所、上不義則楽為詐、此為不利大矣。」（宋濂『諸子弁』「子思子」）

61 円了本は「知」とする（二四葉表）。

62 円了本は「元極　霊極　大極」とする（二五葉表）。

63 以下の議論の紹介は、井上哲次郎「泰西人ノ孔子ヲ評スルヲ評ス」（『東洋学芸雑誌』第四号、一八八二年、五三頁）に同じものが見える。

64 「其書始言一理、中散為万事、末復合為一理」（朱熹『中庸章句』序）

65 朱熹『孟子集注』「離婁章句下」

66 陳士元『孟子雑記』巻一。

67 朱熹『孟子集注』「孟子序説」

68 『二程遺書』巻一八。朱熹『孟子集注』「孟子序説」に引用あり。

69 同書。

70 「孟子が性善の説、その実は仁は心に根（こん）することを謂ふなり。「我れに於いて浮雲の如し」とは、不義の富貴を謂へる耳（のみ）。宋儒の説は、老（らう）・荘（さう）に流る。学者諸を察せよ。」（小川環樹訳注『論語徴1』平凡社、一九九四年、一四八頁）とある。また『弁道』に「性を言ふは老・荘より始る。聖人の道のなき所なり。」（吉川幸次郎・丸山真男・西田太一郎・辻達也校注『日本思想大系三六　荻生徂徠』岩波書店、一九七三年、二三頁）とある。

71 朱熹『孟子集注』「梁恵王章句下」

72 円了本は「性」とする（三七葉裏）。

73 円了本は「広」とする（三八葉表）。

74 方孝孺『遜志斎集』巻四「読荀子」

75 荻生徂徠『徂徠集』巻一八「刻荀子跋」

76 『揚子法言』司馬光序。

77 「王」を「主」としている。

78 円了本は「…欲ス。以為ラク経ハ…」と続く（四八葉裏）。

79 円了本は「史篇ハ…乃チ訓纂ヲ作ル。箴ハ虞箴ヨリ善キハナシト乃チ州箴ヲ作ル」とする（四八葉裏）。

80 宋咸『揚子法言』宋咸序。

81 『揚子法言』司馬光序。

82 薛瑄『読書録』巻五。

83 「去」を「志」としている。

84 『温国文正公文集』巻第七二「善悪混弁」

85 「弓矯」とすべきだが、「弓」を「之」に、「矯」を「矢」及び「焉」としている。

86「的」を「明」としている。
87 円了本は「霊妙」とする（五〇葉裏）。「霊」の略字「灵」を誤ったか。
88「南面」と「西面」が逆になっている。
89「三」を「立」としている。
90「三」を「之」としている。
91「無」を「天」としている。「无」を誤ったか。

本稿執筆にあたり、金沢大学附属図書館より資料の提供を受けた。また、台湾大学教授・佐藤将之先生に便宜を図って頂き、東洋大学教授・三浦節夫先生のご協力の下、東洋大学井上円了研究センターにおいて井上円了「東洋哲学史」聴講ノートを直接閲覧する機会を得た。加えて、二松学舎大学教授・町泉寿郎先生より資料の提供を受けた。各位に感謝申し上げる。本研究は、JSPS 科研費 16J07221 の助成を受けた。